

くらしと教育をつなぐ

We

12月号

特集 からだは語る

女と男の家庭科新時代





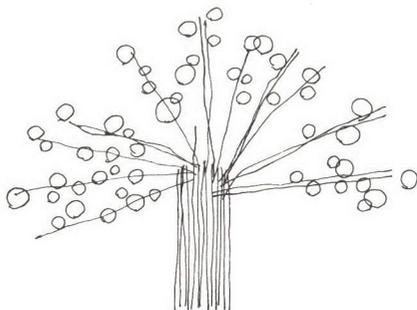
April 28
1886
Aachen

17

くろしよとていしん
なつていしん

We

12月号



《インタビュー》 複眼でみる

関根秀樹さん (インタビュアー 間瀬中子) ……46

「鍛冶屋さんは知的好奇心を刺激する？」

連
載

- かりん区便り 佐藤通雅 ……52
- 現代衣生活考 むらき数子 ……54
- 地域の暮らしと家庭科教育 石川尚子 ……58
- リレーエッセイ
産む・産めない・産まない (5) 高橋富士子 ……60
- ヤング・イン・ワンダーランド
仕事 酒井和子 ……62
- からだにやさしくしなやかに
河村ふみ・加藤由美子 ……64

◆読者の広場 ……66

◎ 編集後記 ……68

〈インタビュー〉

シリーズ 男を尋ねる

伊藤 敏夫さん (聞き手・武田秀夫)

「時代が呼んでいる」4

特集 からだは語る

- ❶ 体が教えてくれたもの
—断食と尿療法から— 公庄れい10
- ❷ 対談 ヒトの食性を考える 田村京子・入江一恵 ..14
- ❸ 新精神療法体験記 中森 恵15
- ☆ 家庭科情報 南野忠晴25
- 書 評 稲邑恭子26
- ◆ 論争しよう
- 「やっぱり縛り合って生きる」
に魅せられる側、の問題 池田祥子28
- 「男性フェミニスト」の危うさ 重川治樹32

女と男の家庭科新時代

- 家庭科—遊ゆう・惑わく
—「愛と性」の授業に挑んでみたけれど…… 蔵本佳子34
- オホーツクの潮風荒く…番外編 その5
—夫婦はやっぱり同一姓がいい!?— 江口凡太郎40
- ◆ 学校模様 ◆ 蔵本佳子・納巳孝志 ..42

近ごろ影の薄いもの。

ロシア民謡

男

労働組合

今さら組合なんて、と
いう声も聞く。ほん
とにそうだろうか。

半加工の惣菜を家庭
に届ける会社に、女ば
かりの組合が結成され
た。

働く女

女の労働組合

時代が呼んでいる

時代が呼んでいる

シリーズ

男を尋ねる ⑤

伊藤俊夫さん

聞き手

武田秀夫

■いとう・としあ

「企業別労働組合」の発想を越えた「統一労働組
合」を推進。中小企業に働く労働者の組織化に取
りくみつつ、全員参加型組合活動を展開している
情報労連・全統一労働組合書記長。



あれはなかったことにしてくれ

武田 配達も女性がやるんですか。

伊藤 ええ。「夕食届けに来ました」って、男がヌツと配達にきたって、主婦はドアを開けてくれませんかからね。セールス・配達・集金、すべて女性がやる。新しいかたちの会社ですよ。

武田 その会社（「ヨシケイ開発」の東京フランチャイズ）に、女性だけの組合ができた。きっかけはどういうことだったんですか。

伊藤 もともとは会社の内輪もめというか、部長クラスが造反をおこしましてね、ある日突然、組合をつくらうと全社員に呼びかけ、加入書を書かせた。ところが、どういうわけか、一週間もしないうちに立ち消えになって呼びかけた部長たち自身が、あれはなかったことにしてくれと。

武田 それはひどい。

伊藤 結局、男のエゴなんですよ。権力者なんだ、男は。加入書を書けといえば書くだろう、やめろといえばやめるだろう、そういうふうにはか女性を見ていない。で、その人たちが怒った。「なんなのよ、これは」と。

それが発端なんです。潜在的には、入社したばかりの男がすぐに管理職になる。賃金も高い。ところが、自分たち女は、いつまでたっても彼らの下で働かされ、賃金は低い、生活は苦しい。おかしいじゃないかと前から思っていたところが、上の男の人たちが組合をつくらうという。「おや、けっこうなことやるじゃないの」と加入書を書いたら、「なかったことにしてくれ」。で、腹を立てた女性たちが、都の労働経済局に駆けこんだりして、私たち全統一労組に話がきたわけです。

水面下の組合づくり

武田 組合のない職場に組合をつくらうとして失敗すると、何年間は草も生えないなんていいですけど、ずいぶん神経を使ったでしょう。

伊藤 ええ。それはもう。公然と旗揚げした時点で、多数派を握りうる状況をつくっておかないとつぶされてしまいますから、それまではどうしても、会社に知られないように水面下で事を運ばなければならぬ。女性だけの職場であるヨシケイの場合、一年ほどのその間が大変だったんですよ。

武田 会合はどうしたって夜になりますよね。

伊藤 そうです。四時半まで勤務。五時までに保育園へ行き、家に戻って食事の仕度。それから出てくるんですからね。集金などの仕事で遅くなると家に戻っているひまがなくて、ホカホカ弁当を買って、子どもさんを連れて。母子家庭の人も何人かいましたしね。会場所も、あまり目立つ所ではまずいし。そうした状況をかかえて秘密裡に組合づくりをすすめなければならぬわけですから、私たちオルグだけではとてもやりきれない。他組合の人たちが事務所を貸してくださった上に子どもめんどろまで見てくださったり、ずいぶん、そうしたネットワークに助けられました。ヨシケイに以前勤めていた女性が「子どもの世話をしましょう」と協力してくれたりね。

武田 水面下で、どうやって組合員を増やしていったんですか。

伊藤 杉並、府中、三鷹と三つの営業所があるんだけど、府中だけはどうしても販売員とコンタクトがとれない。で、多くの友人の教師に頼み込んで、ヨシケイの惣菜をとってもらったわけです。ぼくらは教え子ということにして待っている。と、ヨシケイをやめながらも協力して

くれていた例の女性が、これがまたスゴイんだ、配達に来た府中の販売員に向かって、「あらア、あなた、ヨシケイの人？ あたしもヨシケイにいたことあるのよオ」。いたのは本当なのだから（笑）。「あたし、このうちの先生の教え子なのよオ」。ま、そこはウソになっちゃうんだけど（笑）、「入んなさいよ、入んなさいよ」と、家に入れてしまう。そこで、待機していたばくらが、一か八か、オルグする。もしその人が会社側の人間だったら、とんでもないことになっちゃうんだけど、結局、そうしてコンタクトが取れた府中の女性が、分会の初代書記長になってくれたんです。

話が横ッチョにいくけど……

伊藤 ぼくは長い間、組合づくりを手がけてきたけど、ふつうは、男の人たちの中に核をつくりあげて、後はその人たちが組合加入を呼びかけるというやり方。それが、ヨシケイの場合、女性ばかりでしょう、初めは勝手が違ってねえ。

ぼくのそれまでの認識では、女の人は口が軽いから最後にオルグをしるよと。旗揚げまでは、カミさんにもいふよと。それをモットーに男の組合員を教育してきた

んだけど、まったく逆なんです。女の方が、はるかに口が堅かった。

それに、女の人は、労働基準法や労組法や、こっちが大事な話をしていても、子どもがギャアって泣けば注意がそっちにいつて、それからダレトカさんがナントカしてという話になる。話のトーンが合わなくて困った。本当にわかってんのかなあ、この人たち、と。そしたら、一緒にオルグしていた区労協のAさんが、伊藤さん、女の人は確かに話が横ッチョに行く。横ッチョに行くことは行くんだが、大丈夫、ちゃんと元に戻るよと。

その点、男はマジに集中して一直線にやるけど、女の人は話に広がりがある(笑)。それが女性の定義づけになるかどうかかわからないけど、でも、やっちゃあいけない、言っちゃあいけないということについては、ほんとうに口が堅かった。そして決めたことについてはちゃんと実行した。今でもそうです。

武田 組合運動などをやってきた経験者も、中にはいたんですか。

伊藤 いなかったと思うなあ。みんな普通の人だった。普通の人が、やむにやまれず組合をつくったんです。

組合運動における男と女

伊藤 問題は、既成の組合の場合、男中心で、女性がなかなか執行部に入らないことです。ある組合で最近あった話ですけど、「今年は結婚するから」とか「主人が早く帰ってこいと言うから」とか言って、なかなか執行部をやらない。すると、男は優しいんだね、新婚ホヤホヤじゃ大変だろう、家庭も大事だからと認めてしまう。男だって組合で遅くなれば家庭がダメになるのは同じはずなんですけどね。

ところが、ヨシケイの場合、そうはいきませんからね、女ばかりなんだから。いつだったか、休みの日に中央集会の動員がかかったとき、ある人が「私は行けない、主人が行くなと言ったから行けない」と。そしたら、みんな、烈火のごとく怒ってね。「そんなの、あんた自身の問題でしょう。ご主人が死ぬと言ったら死ぬのオ」「主人なんて別れてしまっていないけど、あたしだって子連れで行くんだけ。あんただけにそんなわがままは許されない」と平気で言う。男はそこまで言わないと思うんだけど。お互いに女性であるがゆえに、言い訳とか逃げだとかを許さないところがあって、厳しい。女の人たち同

士で支えていく難しきみたいなのをお互いに味わいながら、だけど、わがままだけはやめようやと、そういうところがありますね。

吉武輝子さんをお呼びして、春闘学習会をやったことがある。そのとき、吉武さんに、「その、主人とか奥サンとかいうの、なんなのよ」と言われて、わかる人もいるけど、ピンとこない人もいる。言われてみればそうかなと思うけど、でも、「主人とはケンカできない」という人もいる。相手の男性は社会的にもいろいろ活躍していて理解のある人のようなんだけど、夜遅くなることで度重なると、いい顔をしない。そういうのが苦痛になって執行部をやめたいとか、そういうのはやはりありますね、今でも。

武田 そのときに、やっぱり家庭の中でも鬨って、一緒にやっていこうよというふうになるんですか。

伊藤 ウーン。それは、さっきの例のように、お互いに言い合っているよというのはあるんですが、もっと困るのは、夫はそれほどでもないんだけど、相手の実家が、「子どももいるのに組合なんかやって」と。「それだったら仕事をやめろ」と言われて、組合どころか会社まで

やめていってしまうというのがありましたね。

武田 社会とか家庭の中における男と女の問題が、組合運動にも影を落としている――。

太地喜和子の死

伊藤 太地喜和子が亡くなったでしょう。好きな女優だったからショックでねえ。「唐人お吉」を見にいったんですよ。三越劇場へ。あの芝居では、結局のところ、男は権力に利用されて、恋人を裏切ってしまう。ところが国のためだといって女に身を売らせた役人は、明治維新後もやっぱり官僚として生きのびて、政府の要職についている。そして、落ちぶれたお吉に憐れみを施そうとするんだが、それをきっぱり断ったために蹴とばされ、踏みつけられる場面があるんです。そのとき、太地喜和子扮する唐人お吉は、「男はみんな、そうだ」、という言い方こそしなかったが、それに似た言い方で、「あたしを踏み殺して通っていけ!」と、舞台の真ん中で大の字になる。権力をめざすということ、男が社会で出世するということと、女を大事にしないということがオーバードラップして、すごいテーマに挑戦した芝居だなあと。

家庭内の男女関係、家庭には限らないだろうけど、と

もかく男と女の関係というのは、実は、男の生きざまというか、権力に近づこうとする人間どもと、もう少し違った角度で生きている人たちと、なんかそういう生きざまみたいなものが深く関わってくるような気がしますね。
男中心の組合運動を変えていく力

武田 組合というと、「男社会の産物」的側面があるわけですが、女性の組合がこうして出てくると、そうした面に対する、いい意味でのインパクトもずいぶんあるでしょうね。

伊藤 全電通の人に、勉強になるからと、団交に出ても良かったことがある。座っているだけでいいからと。会社側は、大単産の人がいるだけでびっくりしますよね。ところが、全電通の人もびっくりする。十八名の女性執行委員が全員団交に出席するという、その迫力にも驚くけど、子どもを連れてくる人もいるわけですよ。労政事務所を借りて団交をやるんですが、必ず二部屋借りる。一部屋で団交やりながら、もう一部屋で保育。

武田 子づれ団交——。
伊藤 そう。いちばんウマいのは、団交やっていて、かなりエキサイトしてきたときに、小さな子どもさんがト

コトコツって社長の前なんかに行くと、社長も怒れなくなってしまう。雰囲気で勝ってしまうんです。

武田 こうして女性の組合が出てくると、運動のスタイルが変わるだけでなく、要求の内容自体も変わってくるんでしょうね。

伊藤 ええ。保育園の費用を補助させたり、営業所内の保育施設を改善させたり、年次休暇が一日単位でしかとれなかったのを、学校の授業参観とか入学式なんかで休暇をとることが多いわけですから、これではわりが合わない、半日単位で取れるようにしたり。それから私傷病休暇を一か月まで有給にしようとか。これはずいぶん役に立っていますね。賃金も以前から比べれば大幅にアップしましたし、土曜日隔週休日まで行きましたし、やっぱり組合の力ですよ。

大単産中心、本工中心の今の企業別組合ではやりきれないところを、私たち全統一のような企業だけにとられない組合の力でやれることが、まだまだたくさんあると思います。時代が呼んでいる、そんな感じがします。

◎連絡先 全統一労働組合 ☎(03)-3252-6401~5

体が教えてくれたもの

―断食と尿療法から―

公庄 れい



弱い子供

一九三三年一月二十三日、紀州の山深い小さな村で私は生まれた。背中に毛の生えた赤子で、弱い子はみんなそうなんだと、後年父が話していた。医師もいない村では、弱い赤子は育ち難い。そんな子は一度道に捨てて誰かに拾ってもらい、その家の子となって名前も新しくつけてもらおうと丈夫になるという風習があり、何人もの人が父にそうするように勧めた。が、父は、迷信だと言って、それに従わなかったらしい。

学齢期が迫っても、食物を咀嚼できず全部吸って食べていたので、いつも下痢をして栄養不良で小さく、子供のくせに不眠症であった。小学校へ入学する前年の夏、

父は五キロほど川下の医師のいる村へ私を連れて行き、断食させることを決心した。病弱の幼児はその道程を歩けず、柳行李に入れられ、担がれて連れて行かれた。三日間の水断食を入れて十日間ほどそこで過ごし、私は初めて食物を嘔むということを感じた。

その後も胃腸は弱く、お腹というものは痛いものだと思い込んで育った。旧制女学校の寄宿舎に入った時、お腹が痛いとお騒ぎする人を見て、お腹というものは痛くないのが普通なのか、と思ったのを覚えている。しかし、寄宿舎での戦中戦後の食料難、半飢餓状態の食生活は、かえって私の胃腸を立て直してくれたとみえて、その後は、とりたてて困った記憶はない。

中年からの生活の激変と身体の不調

五十代に入ってから、地域の婦人会と市の癒着構造に問題を感じるようになり、生まれて初めて、行政に申し入れをしたり、市会に陳情したりという経験味わうこととなった。その陳情に絡んで市会議員のデッチ上げ発言があり、私は国家賠償法による名誉毀損事件訴訟の原告にまでなってしまった。住民運動のグループや組織等を持たず、国家機構という大きな権力に対して、たった一人で裁判を始めた私は、あまりに無力な自分の存在に深い孤独感を味わっていた。

地域の婦人会と行政との癒着という土壌の中で営まれている私たちの暮らしを、できるだけ多くの人に考えてもらえたらと、ミニコミ「め・め・め通信」(三ヶ月に一度・B5・28頁・三千部・無料)を出し、その費用作りのために着物古着の「あたらし屋」を経営し、また、そこを地域のお年寄りに開放して、無料で70歳からの「ヨーガ教室」を開き、その教室が各所に広がって、自らも講師として駆け回るといふ、超多忙で超孤独な暮らしの中で、私の身体は悲鳴を上げ始めていた。

排便時の下血、手足の理由のない内出血、ポツン、ポ

ツンと身体のおちこちに出て、二週間ほどかゆみの続く湿疹。このような症状は、初めは半年ぐらいの間を置いていたが、次第に三ヶ月、二ヶ月に一度と出るようになり、その症状もひどくなっていた。白目がいつも赤く濁り、皮膚はたるみ、髪はガサガサ、爪はすぐ欠け、いつも眠れず、疲れていた。

身体はこんなに多くの信号を出していたのに、現代医学に身体を預けたくない私は、病院へ行く気はなかった。**快医学に出会う**

70歳からの「ヨーガ教室」に來られる方たちの中には、膝が痛くて座れない、足がフラついて立って動作ができない、背中が曲がって伸ばせないという人達もおられたが、講師の小林ひろ子さんの的確な対応によって、次第に体は勿論のこと心も開かれていくのがわかった。小林さんのその手法は快医学の考え方からきていると聞いて、私もその講座を受けてみることにした。

快医学は演出家の瓜生良介氏が提唱されているもので、宇宙の全生命は快へ向かっての前進運動そのものである、快感を感じた時に自然治癒力が最高に働く、心と身体を快にするためには、古今東西のどんな処方でも取り入れ

ていくという、八方破れの医学である。

診断方法としては、オーリングテストを取り入れている。大村恵昭という日本人の医師がアメリカで研究して広めているもので、まず、右手の親指と人差し指でOの形の輪を作り、その輪を開く強弱によって体の発している信号を的確につかんでいくという面白い手法である。

そのオーリングテストの実習の折、私の身体はとても悪いサインを出した。瓜生氏の診断では、私には、人の免疫を低下させるウイルス（エイズウイルスもその一つである）がついており、各臓器の機能低下が見られ、小腸に前ガン症状があると言われた。

それを聞いて私は深く納得し安堵した。あれだけのストレス、多忙、身体の不調で、何も無いというのも不自然だなーという感じがあったのと、オーリングテストの実習までの快医学の学習の中で、この医学に対する深い信頼が生れていたからである。

瓜生氏の指示に従って、翌日から二週間のミルク断食に入った。赤ちゃんの飲むミルクをカップに一杯ずつ、日に三度飲むので、日常生活には事欠かなかったが、体重が減り、眠っても眠っても眠れるようになり、断食を

終える頃には目が蒼く透けるようになった。その後は玄米菜食を続け、二週間ほどしてから、水だけの断食を五日間行った。これは薄甘いミルクを飲む断食ではどうも断食をしたという気になれなくて、私が勝手にしたことである。八月の終り頃にしたこの断食で宿便もとれ、身体中の組織が入れ替わったような爽やかさを覚えた。

九月からは以前の忙しい暮らしに戻ったが、身体は軽く、手足の内出血、下血もピタリ止まった。その年の十二月から二、三ヶ月程の間、丸坊主になるのではないかと思われるぐらい髪が抜けて、生え替わった髪は若い頃の艶を取り戻していた。

尿を飲む

快医学講座に行き始めた頃、『朝一杯のオシッコから』という本を読んで、瓜生氏に、「身体の不用物であるオシッコを飲んで意味があるのですか」と質問した。瓜生氏は、「いいですよー、僕も飲んでますよ」と、いとも簡単に言われた。受講生の中にある大学の医学部の学生がいたので、私はその人にも聞いてみた。彼は、「免疫学的にはいいんですよ、僕も一度飲んでみたけどまずくても飲めませんでしたよ」と言った。で、野次馬根性の旺

盛な私は、次の日の朝すぐに飲んでみた。その辛いこと、辛いこと。へー、私はこんなに辛いものを食べてるのかしら、と驚いてしまった。その時はまだ以前の食生活のままだったが、一度飲み始めたら三年は続けたいと思ったので、まずいのを我慢して飲んでいこううちに、尿の味がだんだん変わってきたのである。特に断食を始めてからは、ほとんど味も匂いもなく、薄い塩水のようになっていた。断食を終えてからも、四ヶ月程は厳密な玄米菜食でアルコール類も断っていたので、尿はおいしく、これぞ天から与えられたお薬と思えた。

あれから三年半たった今、主に胚芽米を食べ、野菜、魚、時には肉も食べ、ビールも飲む。尿を飲み続けていると、相当塩分を取ったはずなのに味が薄いということがよくある。また、辛い物を食べていないのに、辛く苦く味が濃くて飲み難い時もある。それはほとんど裁判の前や、あたらし屋のイベントや、今のように入稿書きで頭を使った時である。精神疲労がどんなに私たちの生命を痛めつけるか、尿が如実に教えてくれる。

個々の生命がより健やかに生きるために、その生命だけのために、作り続けてこられた血液が漉されて尿とな

る。一つのウイルスが体内に入ると、体内の情報を集めてリンパ球がウイルスと戦い、身体中の臓器が協力し合う、その生命のホットニュースを伝えてくれるのが尿である。また、その尿は個々の生命にとって、今、一番必要な薬のだと、オーリングテストは示してくれている。飲んだ時、身体にフツと馴染む独特の感じからも、それはうなづけるように思う。

いつも新鮮で、病者にも、貧者にも等しく与えられている生命の水。こんなにもおらかな安心の中に抱かれている私たちの生命。そうか、私のしようとすることも、生命の大道にさえかなってれば、成るようになるっていいんだわと、私の心が軽く解けていく。

尿は汚いものという文化の外に出てみて、私は初めてその文化の持つ差別性に気づいた。あらゆる文化は何らかの差別性を抱え込んでいるものだと思うが、そこから自由になった解放感と、もうチューブだらけで死ななくてもいいんだという安堵感。六十年生きてきて良かったなあとと思う。

連絡先 〒六五八 神戸市東灘区住吉山手七の二の一

☎〇七八八一一〇四〇一

対談：ヒトの食性を考える

■ 田村京子（神戸赤十字病院小児科）

□ 入江一恵（兵庫女子短期大学食物栄養科）



人が動物であることを忘れたら

入江 三月に「奇妙な出来事アトビー」の上映会をしたの時に話していた中の、「基本的にはヒトの食性にのった食べ物を」という言葉が、私にはとても新鮮でした。今日は、そのあたりからお伺いしたいのですが。

田村 実は私自身、上の子が体が弱かったので、せつせと卵や牛乳を使ったおやつを手作りして与えましたが、良くなり、玄米食で丈夫になったという経験があります。家庭科で習った「卵や牛乳はいい」ということと矛盾するので、ずっと疑問に思っていたところ、たまたま秋田大学の島田彰夫先生の著書『食と健康を地理からみると』に出会って、目から鱗が落ちる思いがしました。「ヒトの食性」を考えるとというのは、人間は何を食べる動物か、という原点から考えるということです。

例えば歯の構造は、穀物をすりつぶす臼歯が20本、野菜や海草を噛み切る門歯が8本、肉や魚などの動物性のものを噛み切る犬歯が4本となっています。また、口腔からも膵臓からもアミラーゼが分泌されるということから、でんぶんの重要性が認められると思います。

霊長類の進化と食性の変化を見ると、原猿類に属する

ツバイやキツネザルは昆虫などの動物を食べますが、類人猿になると動物性の食品は少なくなり、ゴリラになると完全な植物食になり、ヒトはエスキモーのような凍った生肉を常食とする人たちを含めても、植物、動物半々といったところでしょうか。

島田先生の調査結果では、皮肉なことに、近代栄養学の栄養指導を受けた地域に慢性疾患が多かったことが報告されています。

ヒトが動物であることを忘れ、食べるという最も基本的な行動さえ、その意味が把握できなくなっているのではないのでしょうか。いま、よく言われている「食養」の考え方の理論的裏付けにもなると思うのですが。

入江 その「食養」とは？

田村 それは、生命をマクロ的に見ていく東洋的な陰陽の哲学が原点になっています。人も自然の一部である限り、住んでいる大地の産物を食べることが最も自然であるという「身土不二」の原則や、一物は生命の調和体として存在しているのだから「一物全体」を食べることがその調和を乱さない食べ方ではないかということなのです。太陽に向かって伸びて行く拡散のエネルギーを持つ葉菜

や果菜は陰、地下に根をはって大地へ向かう求心的なエネルギーを持つ根菜は陽で、この両者のバランスが大切だということですね。例えば、極陽の肉類や塩分、その対極にある極陰の砂糖、果物、アルコールといった陰陽両極端にある、本来の食性からはずれた食べ物の取り過ぎが、現代病といわれているものにつながっているように思います。小児科を訪れるアトピーの子供達を治療していてもそう思いますね。

入江 私は今、県立健康センターのアトピー教室を受講していて、昨日は卵と牛乳を使わないクリスマスケーキを焼いたのですが、調理しながら隣の方が話されるには、学生時代キャンプに行き、卵が安いのをいいことに一日六個ぐらい食べるという食事をして、三泊四日のキャンプを終えて山を下りた途端、見事に湿疹が出てびっくりしたそうです。その後結婚されて、生まれた子供もアトピーだったため、親子共に体質改善するのに七年間かかった、ということでした。「除去食を厳しくやるよりも、素材の良い自然食を心がけたら、今はこんなにきれいになったのよ」と、腕を見せてくれました。

かつて授業で、卵と牛乳は完全栄養食品だと、大きな

声で話したことを思うと……。

田村 かつての栄養失調の時代ならそれで良かったのでしょうが、今は栄養過多、アンバランスが問題になっている時代ですからね。

これが本当の食事だ

入江 いま、学生の食生活を診断しますと、まあ、それはひどいものです。食物栄養専攻ということで、一応食べ物には関心があるはずなのですが、一日に昼食だけという人もいます。アルバイト先で食べるものは油物が多いし、寮の食事は栄養士が作る献立なので食品の数はさすがに多いけれど、炒め物・フライが多い。そんな学生に、伝統食としての一汁三菜の献立で調理して、嫌がられるかなと思っていたら、「これが本当の食事だ」と感動しているんですね。もっとも、次の日から食生活が変わると思えないところが悲しいのですが……。

田村 ひとつには、作り方を知らないということもあるでしょうね。外来に来るお母さんは、ひじきの煮かたがわからないというし、「旬の魚を食べてね」というと、「今、旬の魚には何がありますか」と逆に尋ねられたりするのです、私の診察室ではいつも魚の図鑑を見せていま

す。今のお母さんは、50年代後半の急激な洋風化の中で育っていますから。

入江 食品添加物指定品目が急増した時代ですね。

田村 添加物については、そんなに神経質になると食べるものがなくなるんじゃないかという人がいますが、あれはダメ、これもダメという「消去法」では嫌になってしまいますから、「自然の恵みで作られたものを」という基本線をしっかり押さえていくことですね。

「ジャコの骨」と「イモのスジ」

入江 私の郷里は、瀬戸内海に面した半農半漁の村でした。当時、鎮守の神を祭った八幡様の秋祭りに氏子の小學生は引率されてお参りする風習があったのですが、隣村の子供達とすれ違う時、お互いに「ジャコの骨」とか「イモのスジ」と罵声を投げ掛けて親愛の情を示すのです。当時は、その言葉に象徴されるような簡素な食事をしていました。しかし、私の身体の基礎はそこでお陰でできたのではないかと思っています。

また卵の話になりますが、平地飼いの鶏卵ではアトピーは出ないけれど、スーパーで買ったものを食べると出る、という話を聞きました。配合飼料の問題なのでしょ

うが、違いは歴然と出るのでしょうかね。

田村 いつもいい卵を食べていて、悪い卵を食べると出る、これは濁った水に泥をいれても濁りは判らないけれど、澄んだ水に泥を入れたらすぐ判る、ということでしょうか。私たちの体はとても敏感なんですよ。

尿は健康のカルテ

入江 私も食べることには気を使ってきましたが、最近それ以上に、排泄物は自分の健康のパロメーターということで、出るものに気を使うようになりました。

毎朝、尿を50CC飲んでいますが、この話をすると友人たちはエーッと言うのですが、酵素や生理活性物質も多いし、また、前日外食などすると、ときめんに、色、味が変わりますから、尿は私の健康のパロメーターと思っています。

大阪の住吉中学校の枋村先生は、家庭科の授業で「ウンチっていのちと直結しているんだよ」「われわれは動物のウンチを肥やしとして育った植物を食べているんだよ」と、ヒトも生態系の一部であることを、生徒に気づかせているようです。

いまは、環境問題も含め、入れることがばかりでなく出

すこと、食べ物ばかりでなく廃棄（泄）物に目を向けなければいけない時代になってきていると思うのですが。

田村 そういえば、わたしのところにみえるお母さんは、子供が風邪で鼻水が出るとはいうのですが、「ウンコは？」と聞くと、大抵判っていないようです。子育て中はそのことは一番気になるはずなのに。

身体で感じる体験の積み重ねをとおして

入江 食べ物に対してもそうですね。若い学生と接していると、食べ物に関する感覚が鈍くなってきていると感じます。感覚というのは、理屈でなく身体で感じる体験の積み重ねで備わってくるものだから、恐いと思うのですが…。

田村 味覚が鈍くなっているのは、一つには亜鉛欠乏症だからだと言われていますが、素材が良ければ料理はシンプルで薄味でいいと思うんです。私の家では、子供の友達に「おばちゃん、これ、味付け忘れているのと違う？」と言われたりしています。

自分の子供を見ているんですが、小学校までは食事がわりあいきちんとしているんですが、中学校になるとガタッと崩れる。反抗期には、友達と同じようなお弁当でなけれ

ばイヤだと、食べてこない、捨てる、ということでは始終対立が続きました。毒でもいい、友達と同じようなものがない、と言う。夫も医者なんですが、押し付け過ぎではないかと言われたりして、ずいぶん悩みました。「自分の身体に聞いてみてちょうだい」と言って投げかけたこともありす。私の考えをストリートには受け入れてくれなかつたけれど、いまは、体調が悪くなると決して悪いものは食べようとしないのを見ると、無駄ではなかつたなあと思います。

入江 家庭では本音が出るからぶつかると、学校では生徒は教師の期待する答を書き、行動はなかなか変わらない。食べるという日々の暮らしのことが建て前で語られることに、現場の先生は空しさを感じています。

田村 学校で学習したことが、すぐ実行に移せなくても、頭の片隅に入れておくだけで、いつか役に立つこともあるでしょう。学校で食教育をしていくことは、そんなに空しいことではないと思います。要するに、自分の体に合う食べ物と合わない食べ物があることを知り、それぞれが自分の体をおして体験的に把握していくことが必要でしょうね。

『図書紹介』

▽島田彰夫著

『食と健康を地理からみるとー地域・食性・食文化ー』

(一九八八年 農文協 一四四〇円)

私たちの学んだ栄養学は、ヒトの食性から見て果たして正しいのだろうか。近代栄養学に疑問を抱いた著者が、国内外の豊富な調査をもとに矛盾を浮き彫りにする。文明化の進歩は、食に対する本能的な感覚を鈍らせたという警告！

▽ジム・メイソン、ピーター・シンガー共著、高松修訳

『ANIMAL FACTORIESー飼育工場の動物物たちの今ー』(一九八八年 現代書館 二〇六〇円)

アメリカでは牛肉はどのように生産されているか。家畜は農場で飼育されるのではなく、工場で製品として扱われている。その実態を豊富な資料と写真で生々しく訴える。

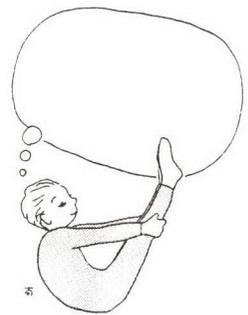
(まとめ・入江一恵)

新精神療法体験記

三年ほど前、中学三年生だった息子が、突然、登校拒否を起こした。私は、自分の育て方が悪かったせいだと、どうしようもなく落ち込んでしまい、仕事も手につかなくなり、思い余ってあちこちのセラピーの門を叩いた。結局、ある所でカウンセリングを二年ほど受けて、何とか持ち直した。その時のセラピストは、私が話すのを、そうですか、そうですかとただ聴いてくれただけで、特に何かしてくれたというわけではなく、話しながら、自分でいろいろなことに気づいていき、自分を整理していったというものであった。

一応、息子との問題は落ち着いたのだけれど、どうして自分が、頭ではわかっているのに、つい、息子や夫に対して、意地悪な言い方をしてしまうのか、他愛ないことですぐ腹が立つのか、その原因はどこからきているのか、知りたかった

中森 恵



が、結局わからずじまいだった。それほど今は必要性に迫られていない私にとって、精神分析は料金が高すぎるし、対話（言語）によるセラピーでない、他のセラピーも受けてみたいと思っていたのだが、かといって、ゲシュタルト療法のように、ただ、感情を吐き出せば、カタルシスを体験して問題が解決するというのにも抵抗を感じた。人前で、どなったり泣いたり、布団叩きをやったり、それをまた、無理やりやらせる（その時は集団心理のようなものでやってしまい、確かにその時はすっきりするのだが、後で、あれは何だったのかと自己嫌悪に陥る）その操作性にどうしても反発を感じていた……。

今年の八月に出版された『ボディワーク・セラピー』（JICC出版）という本の中に、「キネシオロジー」というセ

ラビーが紹介されていた。そこには、こう書かれていた。

——このキネシオロジーでは、治療において扱われる問題を、あくまでも感情的なストレス、トラウマ（心理的な外傷）と結びつけて考える。私たちは、自分自身の感情ばかりでなく、父、母、そして家系から伝えられた感情を自分のものとして生きている。私たちのからだの細胞ひとつひとつは、以前私たちに起こったことを、なんでも起こった通りの形で記憶している。キネシオロジーでは、筋肉反射テストというテクニックを使って、直接からだにその記憶を聞いていく。筋肉反射テストとは、筋肉がストレス下において弱くなるという原理を利用して、からだに話しかける方法である——

からだの細胞の記憶、家系から伝えられた感情というところに魅かれ、半分は好奇心からであったが、「キネシオロジー」というのを受けてみることにした。

「キネシオロジー」といっても、たくさん種類があって、キネというのには、筋肉の動きの意味、オロジーとは科学のことで、一般に筋肉に働きかけるボディワークをいうのだそうだが、その中で、私の受けた「キネシオロジー」は、ゴードン・ストークス、ダニエル・ホワイトサイド、キャンデイス・キャロウェイという三人のアメリカ人によって開発されたス

リー・イン・ワン・コンセプト（からだ・こころ・魂をひとつのものとして扱うの意）の「キネシオロジー」だそうだ。

まず、初回。始めに自分の問題——困っていることは何かを話す。私の挙げた問題は、①すぐ、眠くなること。何か差し迫ってやる必要がある時はそうでもないが、取り立ててやることがない時、あるいは嫌なことがあると、すぐ布団を被って寝てしまう。②その後、また何もなかったと自己嫌悪に陥る（鬱的気分）。③夫や息子に対してイライラする。腹が立つ。④感情を表現することを我慢する。

言い終わると、セラピストは、私の両手の手首を持って、人差し指で手首に近いある部分を軽く押し、「今挙げたあなたの問題は今日はこれで十分ですか」と聞く。イエスだと、その部分の筋肉が緊張し、ノーだと弛緩するのだという。私のほうは、強く押されたか、ほとんど押されていないと感じるだけなのだが、私のからだの反応はイエスだと言っているとセラピストは言う。次に、このセッションの時間はどれくらいが適当か、この問題についてワークをした後の効果があるのか、それを本人が受け入れるかなども、同じようにして、からだに聞いていく。イエスですか、ノーですかと聞いていくやり方に、私はコックリさんを思い浮かべてしまい、なん

かおかしかった。

次に、私がストレスや苦痛に対してとる態度を、また筋肉反射テストを使って聞いた。これについては、「1番ですか、2番ですか……」と聞いていって、「あなたは6番だと言っています」と言われたのだが、何のことかさっぱりわからない。実は、ストレスや苦痛に対して人がとる態度を15段階に分類してあって、それに番号をつけてあるのだ。たとえば、1番だと、痛みを心を奪われる。2番だと、薬物に依存する。というふうな。からだは1番が何か、2番が何か知っているわけではないし、セラピストだって全部覚えてはいるわけではないという。だけど、からだは反応するということは、そこが神秘的といえば神秘的なのだが、からだは何か知っていて、それが私からだだとセラピストの間で伝わると考えるしかない。このことを、私が素直に受け入れてしまったのは、その6番があまりにもドンピシャリと当たっていたからである。6番には、こう書かれていた。

——活発な性生活から身を引く傾向がある。……女性としての役割をとろうとしない……

「そこに書かれていることと、あなたの挙げた問題とはつながりがありますか」と聞かれた。確かにないとは言えない。

あまり積極的にセックスをするほうではないし、できるだけ避けたいし、でも、セックスの後では、エネルギーが満ちてくる感じがあって、鬱的に寝てしまうことはない。反対に、朝、夫と言ひ合いをしたりすると、イライラして、夫や息子が出かけた後、何もする気が起こらず、また、寝てしまいたくなる。実際、寝てしまうことが多い。

その、イライラや、怒りの感情の程度がどのくらいのレベルなのか、それも、からだに聞いてみると、二六〇%という。一〇〇%が基準だから、かなり多い。それはこれからワークで下がるかどうか、体に聞いてみると、0になるという。その怒りの原因はどこにあるか。「38—30歳ですか、30—20歳ですか、……胎内10か月、9か月」と逆上って聞いていくと、何と、胎内四か月のときに原因があると言う。

「それは母親だけに聞いたことですか」と聞くとイエス。「聞きたくないことを聞いたのですか」イエス。「そのことを思い出せますか」イエス。

それから、セラピストは私の脇に立って、額と後頭部に手を当て、「目を閉じて胎内に戻ってください」と言う。「何か見えますか、聞こえることでもいいですよ。浮かんできたら言ってみてください」。おばあちゃんの声が聞こえるよう

な気がする。でも視覚的なものは何も浮かんでこない。「浮かんで来なかったら、でっちあげてもいいですよ」。私は祖母にいじめられている母親をでっちあげた。「あなたは何を感じていますか」「母親がかわいそう」「お母さんがかわいそうなのですか、あなたがかわいそうなのですか」「両方だけど、どっちかって言うと、自分がかわいそうなのかもしれない」「何を我慢していますか」「言い返してやればいいのに」。「今度はお母さんになってみてください。……言いたいことを言ってみて」「うるさいわね。だまってよ。……私だって、一生懸命やってる」「今度はおばあさんになってみて。……どう感じますか」「憎らしい」「どうして?」「息子をとったから」「息子さんのお嫁さんでしょう?」「だって、末っ子でたった一人の男の子で、体が弱くて大事に大事に育てたから」「その怒りは体のどこにありますか」「胸です」「どんな色をしていますか。どんなふうになっていますか」「黒いです。ゴムみたいに張り付いています」「それを取れますか、やってみてください」「私は手で引きはがす動作をする。「取れましたか」「少し薄くはなっただけど、まだ残っています」「じゃあもう一度やってみてください。……どうですか」「二回くらい繰り返す。「どうですか」「まだ、ほんの少し薄く

斑点状に残っています」「それはどうなると思いますか」「あとは自然にとれます」。「それでは、また胎内に戻ってください。……あなたに何と言ってあげたいですか」「心配しないで大丈夫」私は母親が結構強い性格であることを思っていた。「何か、浮かんでくるものがありますか。見えたら言ってみてください」……うちでのこづち。自分でもよくわからないのだが、突然打出の小槌が見えた。私は子宮の中に丸まっけていて、私の前にとても小さい人間が打出の小槌を持って現れたのだ。「打出の小槌です」。その小槌を振って、私におおきな一れ、おおきな一れと言っているような気がした。心地よい涙がこぼれた。

セラピストは私の前に戻ると、その打出の小槌は私を助ける象徴として適当かどうか、またからだに聞いた。適当らしい。「あなたは何を学びましたか」「人のことはあんまり気にしなくていいのだと……」体の底からそう思えた。途中でどこかで、これはゲシュタルト療法だなど、私の意識は思いつつ、ゲシュタルト療法に批判的な私ものってしまった。自然な感じが入っていったのと、でっちあげてくださいというのが、面白いと思ったせいかもしれない。

ワークの結果、私の怒りの感情は、0になったということであったが、二日後の未来に、反動が来てまた51%に戻るという。それを防ぐためのワークもやった。いつも、夫との間で繰り返すパターンである場面を想定して、またでっちあげた。それは、他愛ないことなのだが、夫から時間がないから洗濯物をクリーニング屋から取ってきてほしいと頼まれる度に繰り返しているパターンである。休日はゴルフ、ゴルフで、自分の時間はたっぷりあるのに、そういう時ばかり時間がないなんて、面倒なことはみんな私に押し付けて、私のほうは、自分の自由になる時間もなく、休日は家事に明け暮れ……、そう思うと、素直に「いいわよ」とは言えなくて、「私だっ て時間がないのよ」とか「取りに行く時間があるかどうかかわからない」とか、意地悪な言い方をして、後で自己嫌悪に陥るといったパターン。私が女性役割を取りたがらないというのは、女だからさせられているような気がしてしまうからだ。でも、よく考えれば思い過ごしである部分はかなりある。ワークでは、あっさり「時間があつたらね」と答えるだけにした。

私は、翌日から夫は泊まりでいないということを忘れていて、実際には、二日後の朝、夫はいなかった。ワークの効果

があつたのかどうか、私は、頼まれていたわけでもないのに、「取ってきてやるか」と独り言をいいながら、ボードに止めてあつたクリーニング券を持って家を出た。とても気持ち が穏やかだった。

セッションが終わって、疑問がありますかというので、まだ、どこかで信じられないと言うと、それも体に聞いて、「確かに意識のレベルでの疑いがありますね、でも、潜在意識とからだのレベルでは疑いはないですね」と言う。「行動のバロメーター」という表があつて、意識、潜在意識、からだと三段階に分けられている。からだに聞くと、私の疑いは、その表の潜在意識、敵意の層の「いじめられた」という感情からくるものだという。思い当たることがないではない。

でっちあげたことに関しては、「でっちあげてもいいんです。案外はずれてはいないものです」と言う。確かにそうかもしれない。よく思い出す三、四歳くらいの記憶とつながっている。母が祖母に何か言われて泣いていた場面を私はよく思い出す。その時、自分がどういふ感情を感じていたのかは思い出せないのだが。心理学的に言えば、感情を言語化（意識化）できなかつたからこそ、その場面がこだわりとなつていつまでもこころに残つてしまふと言えるのだが……。母が

いじめられていたのは、何もその時だけではなかっただろうと思う。祖母に一番可愛がられた私が、母と祖母の間で切ない思いをずっとしてきたに違いない、その固定観念は、本当に胎内四か月の時にできたのかもしれないとも思えてくる。私の持っていた怒りの感情は、私自身の怒りではなく、母や祖母のものだったのだろうか……。

二回目のセクションも、私が提出した現実的な問題に関して、同じように進められた。またもや、原因は胎児期の四か月にあるという。余程、四か月というのは、私にとって受難の時だったらしい。四か月の胎児になってみたけれど、今度は何も浮かんでこない。四か月といえば、つわりがひどい時期であるし、現に、母はともつわりがひどかったと聞いていたので、結婚してすぐで、若くもあつた母が妊娠を受け入れられなくて、私を憎んだのではないかと想像した。思い出せないけれど、そんなふうに想像すると言ったら、それで構わないらしくて、「では、母親になってみてください」と言う。望まぬ妊娠で、私に敵意を向けている母親に対して、その時私の感じたこと、言いたかったことは、「わたしのせいじゃない」ということだった。そこで、ハツとした。私は、人が何か言ったことに対して、非難されると過剰に反応

するところがある。相手はそんなつもりで言っているのではないのに、「私のせいにしないで」とか、「私には責任はない」と、ついムキになってしまう。案外、その原因の根っこは胎内四か月の時にあるのかもしれないと思えてきた。子供の頃、弟たちとケンカをすると、いつも、「あなたはお姉さんでしょ」と、私が叱られた。自分に非がないのに責められることに対して、我慢がならないという思いが強く、私が悪いんじゃない、と自分の正当性を頑固に主張した。そのこともまた、私がよく思い出すことである。

私の怒りの原因が、本当に、四か月の胎児期にあるのかどうか信憑性はない。でも、事実かどうかは別として、それを受け入れてみると、私にとっては全てのなぞが解けるし、納得がいく。もちろん、それで、私の態度や行動が変わるのになければ意味はないのだが……。

今のところ、眠くなることはぐっと減った。たまに昼寝しても自己嫌悪に陥ることもなくなった。わりと平和である。

(フリー・ライター)

(キネシオロジーについての問合せは、横浜0445-431-8

119 大塚成男 兵庫0798-73-7259 石丸裕高)

「家庭科教員をめざす男の会」は、十一月十六日、大阪府教育委員会に要望書を提出しました。「男女共修の家庭科は男女の教員数が半々になったときに完成する」という標語を掲げて（？）結成された「男の会」としては、少しでも男性の家庭科教員を増やしたいという立場から、まずは地元の教育委員会に足を運んだというわけです。

要望事項は、

- ① 家庭科の男女共教（男女の教師で教えること）についての府教委の考え方を明らかにしてほしい。
 - ② 男性教員が家庭科の免許を習得しようとする際に「職免」（職務に服する義務を免除する）を適用するなどの便宜を図って欲しい。また、免許取得を奨励し、必要な措置を講じて欲しい。
 - ③ 免許取得をした教員について、転科も含め、授業が持てるようにして欲しい。また、家庭科の研修などにも参加できるようにして欲しい。
 - ④ 家庭科教員の採用にあたっては、男性の採用を積極的にすすめて欲しい。
- というようなものでした。

二社のテレビ局が取材する中、総務の男性に要望書を渡し、今年中に、できるだけ文書で解答して欲しいと伝えました。対応は丁寧だったといえると思います。その後、廊下を隔てたところにある教育記者クラブで記者会見（！）も行いました。四つの新聞が地方版で取り上げてくれました。

十一月二十二日には第二回会合を開き、授業の実践報告や、通信教育のスクーリング参加報告、採用試験受験報告など、男性会員の活躍の様子を聞きました。

- ① 来年一月に会報第一号を発行する。
- ② 通信費分として、年会費千円を集める。
- ③ 家庭科教員養成にかかわっている大学関係者なども含め、会員を全国的に拡大していく。
- ④ 次回会合は、「家庭科―遊ゆう・惑わく」の執筆者の浅井さんの模擬授業をメインに二月頃に持つ。などを確認しました。このときもテレビ局が二社取材にきていました。「内容よりも話題性だけで取り上げられているなあ」という感否めませんが、世の中の男性が家庭科や家庭科の扱っている内容に興味を持つきっかけになってくれればと思います。（南野忠晴）



稲邑恭子

こころと身体を二分するデカルトの二元論を契機として、近代医学はめざましい発展を遂げた。けれども、科学的な治療法が発達するにつれ、医師の関心は、患者から分離された病気そのものにむけられるようになり、古代から治療行為に不可欠であった「癒しのわざ」はわき道に追いやられた。

一九世紀、生物学の二人の権威、ルイ・パスツールとクロード・ベルナールは、病気の最大の原因は病原体のせいなのか、それとも、人の内部環境（感染してしまうからだのありよう）なのかという論争を生涯続けた。臨終の床でパスツールは「それは内部環境だ」と相手の正しさを認めたというが、それ以後も、医学の主流は病原体を追いかけることをやめなかった。

しかし、一九六〇年代以降に始まった西洋医学の威信の揺らぎは、とりわけ米国内

においてようやく、こころと身体を一つに捉える古来の「癒しのわざ」を呼び戻そうとする試みを生み出している。

* * *

『内なる治癒力』（ステイブン・ロック／ダグラス・コリガン著 創元社 一九八六年）は、最近注目を浴びるようになってきた「精神神経免疫学」の立場から、豊富な学識と最新の研究成果を援用しつつ、近代医学のいわば盲点であった、「自己治癒力」の解明に取り組んだ労作である。

科学的裏付けを重視しながらも、技術偏重であった近代医学の反省にたつて、古今東西のさまざまな癒しの手法にも注目し、従来東洋医学で扱っていた領域を、西洋医学の英知で読み解こうと試みている。

免疫機能の低下によって引き起こされるといわれる癌やエイズが大きな課題になっている今、「ストレスの研究」を中軸に、身体の中の免疫機能と精神状態の相関関係を明らかにしていく「精神神経免疫学」と、それを臨床的に応用した「行動医学」は、

こころと身体を統合するトータルな医学への可能性を秘めていると思われる。

著者は、正当医学に対抗して出てきた、

こころと身体をトータルに据えるホリスティック医学に対して、その「精神」は評価しながらも、科学的な実証めきで自分たちの治療法のみが唯一正しいとする、ひとりよがりになりやすい傾向を批判しているが、もう一点、患者の「自己治癒力」を信じていくこれらの療法を持つ「両刃の剣」的危険性——治療者の責任が免除され、失敗は患者自身の努力不足のせいになされてしまうという指摘は重要であり、今後の課題であろう。

* * *

『奇跡的治療とはなにか』（バーニー・シゲル著 日本教文社 一九八六年）は、米国で「例外的癌患者たち」という自己治療に取り組むグループを主宰し、夢、描画、イメージなどの手法を活用しつつ「奇跡的生還」への援助を行っている外科医からの、静かで暖かいメッセージ。

一人の医師として「資格もないくせに神

の役割を演」じなければならぬことの苦悩の中、サイモン・トン夫妻（癌のイメージ療法の創始者）に出会い、グループを発足させることを思い立った著者の、「人間が持つ本来の自己治療力に一人でも多くの人たちが気づいてほしい」という思いが全編を通して伝わってくる。

「無意識の心に触れてその力を利用すること」が、東洋や工業化以前の部族社会においては、標準的な教育の一環として用いられて来たにもかかわらず、「近代教育」ではその大切なことが切り捨てられてきてしまった、というくだりを読んで、これはそのまま日本の話、とため息が出る。

* * *

同じく、古来の癒しの伝統と西洋医学との架橋を、トランスパーソナル心理学の立場から試みたものが『自己治療力』（ジー・アクターバーグ著 日本教文社 一九八五年）。

癌のイメージ療法の第一人者である著者は、現代治療をより人間的・精神的なもの

にするには、「想像力による治療」が不可欠と、その先達であるシャーマニズムにそのヒントを見出そうとする。

文化人類学、歴史学、心理学と多岐にわたる豊かな知識を縦横に駆使しつつ誘う、シャーマニズム、古代ギリシャや中世のイメージを使った癒しの療法の世界は魅力に満ちていて、繰り返し味わいたい本。

近代医学の成立は、「魔女狩り」Ⅱ女性による民間治療の抹殺によって確立されたという指摘にもハッとさせられる。

最後に前掲三書に共通したメッセージであるが、「無力感」が最大の敵であること、おとなしい「模範患者」よりも、医者と闘う「不良患者」のほうが、圧倒的に生存率が高い（ついでに言えば、凶悪犯の収容施設での癌の死亡率は極めて低いという）ということは、怒りや悲しみを発散できずに内に溜め込むことや、罪悪感を持つことがどんなにからだにとって破壊的な作用を及ぼすかを示唆していて興味深い。

* * *

さて、がらりとかわって、整体法の創始者である故野口晴哉氏の『整体法の基礎』『体癖Ⅰ、Ⅱ』（全生社）は、催眠術にかけられるようなカリスマ性が立ち上ってくるような気はするけれど、刺激的なおもしろい本。前者は武術の呼吸にも通ずるコミュニケーションの極意がちりばめられている（要するに相手のゆるんだすきをねらって言葉を届かせるといふ）。後者は人の身体の癖から一種から十二種にわけて、それぞれの性格をズバリ言い当てている。自分は何種、あの人は……などと、あててみるのもおもしろいけど、特にこれは、自己受容をしたいひと、あるいは相手（子供？生徒？つれあい？）を自分の思い通りに変えたいとついつい思ってしまおう方にお薦め。違いは違い、しかたないと諦めがつかます。ちなみに、私は三種（消化器型）で、「机の中も頭の中もクシャクシャ」と書いてあるので、うまいこと言うなあと妙に納得、われながらいいかげん愛想が尽きていた「だらしないさ」にも諦めがついたのです。

「やっぱの縛り合って生きる」に

魅せられる側、の問題

池田 祥子

〈おおかあちゃん〉と〈インテリ女〉の二分の問題

篠原さんは、私や寺島さん・杉山さんの反論を読んで、「この箇所、読んでくれたのかなあ」「そこはこうやって応えているではないか」などと、苛立ちや不満を持った——と書かれている。

そして、特に私に対して次のような「不満」と批判が述べられている。

——池田さんが、ぼくの言い方のどこから「彼が、『有能な』〈インテリ女〉よりも生活まるごと背負いこんで生きる〈おおかあちゃん〉に親近感を持つというのも、彼らしいなあと思っています」という感想を持つにいたったのかさっぱりわからない。

——ここで、女たちを〈おおかあちゃん〉と〈インテリ女〉

に二分したのは、ぼくでなくて、池田さん自身だということを見つめてもらわなくてはならない。

この点に関して、半分は私の責任として謝らなければならぬ。しかし、もう半分は、ここで改めて「反論」したいと思う。確かに、〈インテリ女〉という不正確な括り方、少々感じの悪い言葉を持ち出してきたのは私だ。篠原さんのインタビューの中のどこを見ても、こんな言い方はしていない。その意味では、「論争」の初歩的なルール違反として謝りたいと思う。「揚げ足をとる」という以前に、相手が言ってもいない言葉を「捏造」してしまったのだから…。

ただ…（ここからが弁解と反論です）、〈おおかあちゃん〉という言葉は確かに篠原さんから聞いたものだ。篠原さんは、「かれこれ二十年前」と書かれているけれど、私が聞いたのは1985年だったから、7年ほど前のことだ。篠原さんの発する〈おおかあちゃん〉という言葉の独特のニュアンスとイメージ——その時以来、私の中に染みついてしまった。そして、インタビューの中の次の一節に出会った時、私は迷わず〈おおかあちゃん〉という

言葉を当てはめてしまったのだろう。

——上昇していこうとばかりする男たちは、むしろ、家庭に縛られ子どもたちに追い回され、しかもその中で、子どもの教育のことか食い物のことかを考えつづけている女性たち、その熱心さの中にはぼくなんかいろいろと気になることもあるんだけれど：（略）、とにかくそうした女性たちの生き方に学ぶべきなんじゃないか。

篠原さんは、「今日、ぼくは、〈おかあちゃん〉という表現に抵抗感を持っている」（なぜ？どうして？もきいてみたい…）そうだから、これからは〈おかあちゃん〉という言葉も慎まなければならぬだろう。

だが、篠原さんの中には、今あげたような「生き方」を学びたい女性たちの一方で、「学びたくない」あるいはむしろ批判したい女性たちが想定されていると思われるのではない。というのも、篠原さんの「近代主義的男女平等論」批判に関わって、次のように述べられている所からの類推ではあるが。

——能力があるにもかかわらず女性がしかるべき社会的・経済的権利を保障されていない、だから保障を！というのが近代主義的男女平等論だと思っただけで、それは

やっぱり近代社会にとって都合のよい議論なのであり、結局のところ、男の間が能力別に分断されてきたように、女の間も能力別に分断されることになるのではないか。

このような所から、自らの「能力」の社会的保障を求めて「近代主義的男女平等論」を主張し続ける女性たちが私の中にイメージ化され、一方の〈おかあちゃん〉の生々しい存在感に対比して、つい（浅はかにも）〈インテリヤ〉という言葉をも「捏造」してしまったのだ。

だとすれば、私の〈おかあちゃん〉〈インテリヤ〉の二分化は、正当化できはしないけれど、全く根拠のないものでもないことが分かってもらえるだろうか。

だがやはり、「論争」としては、「近代主義的男女平等論」とは何か、「能力主義」とは何か、そして何よりも篠原さんと私とがぶつつかる「家庭に縛られ子どもたちに追い回され」る女たちの世界とは何か、などに焦点が絞られるべきだったのかもしれない。

「縛られて生きる」？「関わりの中で生きる」？

「論争」の難しさは、双方の一寸した違いに端を発し

ながら、次第に、「言葉尻」を捕らえたり、「揚げ足」をとったりしながら、互いに「苛立ち」ながら、枝葉末節に陥って行ってしまうことだろうか。

自戒しなければと思いつつ、今回の私のこだわりを引き出した肝心の言葉は、やはり「縛られて」なのだろう。

この言葉を篠原さんは、「関わって」とほぼ同じ内容で使っているのだろうか、と理解はできる。しかし、「家庭に縛られ子どもに追い回され」る女の世界をそのまま受け入れた所で用いられる「縛られて」という言葉に、私はどうしても馴染めないし、その世界やその言葉に気楽に入り込んでしまう篠原さんの感覚に「苛立って」しまうのだ。

「家庭や子どもに縛られる」世界というのは、私からすれば、どうしても「社会的に」「否心なしの」「他律的な」世界であって、「このまま認められていい世界」にはならない。「障害児」を抱えて、より多くの労力を費やさざるを得ない母親の立場も、決してこのままであっていいとは思わない。女にとっても、そして当の「障害児」自身にとっても、また男にとっても……。

まさしく、リブやフェミニズムが問うたのも、こうい

う「女」の抑圧を巧妙に仕組んでいる「近代」のありようだった。「女」の「不平等」「不自由」を内に含む「近代」は、振り返って見れば「男」をも「自由」にはさせていない社会ではないか、という「発見」だった。

篠原さんは、寺島さんの「主張」がピンとこないらしく、「近代」に男用、女用があるのか？、と奇妙な問いを発して問題を逸らしている。寺島さんの言いたかったことも、この「近代」の内実——「自由」「平等」という理念を自ら裏切っている——を、「女」の側から切り取ってみた光景だったのだ。「女はまだ『近代』すら獲得していないのに……」と。つまり、「近代」は男女の性別分業を社会的に繰り込んでいるために、男のありようと女のありようと、どうしても非対称にならざるをえない。そして、「近代」を批判するとは、その男女それぞれのあるようを、そのいづれをも批判的に対象化するこ

とではないのだろうか。

「近代」批判という名のもとで、現実の「女」の「自由」や「平等」への希求はいささかも封じられてはならない、と私は思う。「女」の「自由」や「平等」の獲得は、少なくとも現実の「近代」の地平を揺さぶり、それ

を壊すことなくしては実現しえないだろうと考えているからだ。

篠原さんは、「縛り合わない関係」なんて希求しない、と言っている。武田秀夫さんとのやりとりを少しだけ再現すればこんな具合だ。

——武田…不自由を逆に生きてしまおうという。

——篠原…そう。なんかそういう感じですね。

——武田…「共に生きる」という観点から言って、「縛り合う」ということを、むしろプラス・イメージで考えよう。

——篠原…そうですね。逆に「縛り合わない関係」というのは、ぼくにはあんまりイメージが湧かないというか、リアリティが感じられないというか、そんなものには憧れないというか、希求しないというか。

「家庭や子どもに縛られる」世界に住まわせられる「女」にとって、人と人との関係は今少し軽やかになってほしいものだ。この世に生まれ、そして死んで行く人間、しかも、人に保護され支えられ、介護され看護されることなしには生きられない人間、であるから、どんな

に「軽やかな関係」といえど、それは必ず人と繋がり、重なり合い、したがって、さまざまな矛盾や葛藤をその内に抱え込むだろう。「女」に家庭や子どもを任せてしまった「男」の「自由な人間関係」と、家庭や子どもの世界から思い描く「女」の「自由な人間関係」とは、同じ言葉ながら、その内実はかなり違ってくるのではないだろうか。

「家庭や子どもに縛られる」世界に魅せられるのは、それは「縛られない」世界に身を置く者（男）だからではないのか？ もちろん、そこには人と人との濃密な関わりが積み重ねられているわけだから、私たちは「愛」を感じとるし、「美德」も見て取れる。しかし、それは決して、「美化」されてはならないと思う。勝手に「感動」してほしくないと思う。

「縛られる」世界を超え出たうえで、人と人との関係は、まさしくこれからの私たちの課題なのだ。「イメージが湧かない」のも「リアリティがない」のも、むしろ当たり前ではないか。私たちがともに手探りしながら作って行くものなのだから…。

「男性フェミニスト」の危うさ

— 自戒をこめて —

重川 治 樹

足立さんという方は大学の先生だそうですが、研究者として作者にモノを言おうとするなら、最低限の手続きを踏んでいただきたいものです。

「重川さんは子どものお尻をふいたり、うんこのついたおしめを洗ったりしたことがあるのでしょうか」と書かれています。私の「父子家庭の視座から」が載っているWe 五月号に広告が出ている拙著『シングル・ペアレント』（光雲社）の74〜75頁には、オムツ替え、オムツ洗いの私の体験が書いてあります。足立さんは育児家事も子どもの送迎もこなせる「共稼ぎの二児の父で」、ご自分がフェミニストであることを匂わせ、その立場から他者を裁いていらっしゃるのですが、肝心な所は女性頼みなのに、ちよっとばかり育児家事に手をつけたぐらいで、すぐにその自分を正当化する、この国の自称フェミニストの男性の通弊を脱しているとは思えません。私を含めたWeに集まる男性たちも、女性のことを分かったような言辞を弄する“何も分かっていない”男性

のインチキ性を、女性たちから突かれ続けて針のムシロに座らされてきたわけですから。

私は連れ合いの女性を失って初めて、男性が生活レベルからメンタルな領域まで、いかに女性に頼り切っているかということ、またペアでいる時はそのことが殆ど分からず、自分はほかの男性ほど女性に頼ることなく自立しているなどと思ひ込みがちであったことも痛感しました。そうしたいい加減な男性（私）が連れ合いの女性を失ったのですから、父子家庭が地獄になってしまふのは当然なのです。しかし、それは私に限ったことではなく、当人がどんなエラそうなことを言っても、言いつくろっても、いい加減さにかけては、どの男性も私と似たり寄ったりなのではないかと思えます。お互いに深刻な自省を通して、そのいい加減さから少しでも脱却する努力こそ必要なのだと思います。

また拙著の広告の中の樋口恵子さんの文章は「朝日ジャーナル」91年一月号の「メディア時評」のもので、

——「最近注目されるのは“男の論理”が貫徹する大企業に勤務する男性著者が出てきたことだ。I（中略）重川治樹氏は、思春期の子供二人をもつ父子家庭の父親で、毎日新聞記者、それも整理部という息の抜けない職場にいる。家事育児を「する男」に変わった重川氏から見ると、この世の思想・学問・政治システムなどは、『半人前のタッチャン坊やのヨタ話の集積』（後略）」

——と書かれています。実は（中略）がこの際重要なので敢えて

紹介しますと、

——「かつてはフリーライター、翻訳者、大学の先生など、自由業に近い人が多かった」とあるのです。

企業に勤める男性のしんどさと、象牙の塔の中で十分な時間を保証され、自由業に近い男性である大学の先生・研究者の実態とを、共に熟知していらっしやる樋口さんだからこそ、企業に勤める男性の著書を注目されたのだと思います。

それから、シングル家庭とペア家庭の違いをも、足立さんは、もう少し注意深く見定めるべきだと思います。育児家事は、交替してすると、一人きりですのとは精神的な負担が全く違います。相談相手がないことがしんどさに輪をかけるのです。

女性に頼り切ってきた男性がある日突然、たった一人で（私の場合は元妻の母に相当助けてもらいましたが、それでも、すさまじい負担増でした）育児家事を何もかも始めなければならぬ父子家庭の父親の悲惨を、女性とペアを組んで生活を営み、ご自分が思っているより遙かに女性に頼っている筈の男性が本当に理解できるとは思えません。

私は真の男性解放は、女性への一方的な甘え、依存を一度断ち切って本当の意味での自立を獲得することが必要だと考えており、その意味で、男性たちに「父子家庭のススメ」をしています。『教育評論』十月号にも「ススメ」を書いています。同号の「二〇〇〇年までに実現したい教育のなかの男女平等」（中嶋里美さん）

には、「父子家庭の自殺率、心中率は母子家庭の七倍」とあり、実態は部外者の想像を絶するものがあります。

男性が生活自立の訓練を受けることが殆どない社会風土と共に、父子家庭の父親が男性社会の落ちこぼれという烙印を押される精神的側面が大きいからです。

正当に認知されず社会の暗部に押し込められながら、男性解放と、女性との真の協力関係、新しい社会のあり方を考える上で、大きな手掛かりを秘めた父子家庭です。足立さんには、大いに父子家庭を研究していただきたいと思いますので、参考文献をあげておきます。

▽『父子家庭を生きる』勁草書房

▽『ひとり親家庭の子どもたち』川島書房

▽『父子家庭——くらしの実態と当事者組織への道』ミネルヴァ
書房

▽『解体家族』批評社

▽『講座社会福祉第七巻*現代家族と社会福祉』有斐閣

▽『クレイマー、クレイマー』以後——別れたあとの共同子育て
て』筑摩書房

家庭科 — 遊ゆう・惑わく

「愛と性」の授業に

挑んでみたけれど……

●東京都立稻城高等学校●

蔵本佳子

(よーし、今日は、この一時間に私の集中力をかけてみよう……)

そう思いながら、心に鉢巻をしめて、E組の教室に向かった。まず、一時間目は、ビデオを見せて、彼らの様子を観察した。タイトルは、「胎児診断」あなたは生命を選べますか」。

障害児であるか否かを診断する技術をめぐって揺れ動く母親、兄弟姉妹、父親、障害の子をもつ親の会の人々、医師たち。その生々しい映像にどんな反応があるか……

ほとんどの男子がしゃべり続けて関心を示さない。一人、クラスのリーダー的なKが机を並べて寝そべりながらも、熱心に見ていた。女子は、一か所にかたまり、話

もせず真剣に見ている。ほとんどがじっと見ていた。二年生の時、授業で扱って、手応えのあった内容だ。

ビデオを見た後の休み時間にKにたずねると、「うーん、わかんねえ」の一言。(そうかあ、このビデオから女性の痛みをイメージすることも無理なのかなあ)と、ちよっとひるむ。

いよいよ授業、思ったことを何でも口にする猛獣たち(?)のクラスだけに、きれいごとをならべても切り込めない。まず、私が真剣であるという迫力を示すことから始まる。

「今日はあなたたちにどこまで迫れるか挑戦したい、だから、茶化さないでまじめに答えてほしい……」

そして、文化祭の「オープニングセレモニー」で、各クラスの出し物を体育館で宣伝する時、三年A組の男子（E組の男子の友人たち）が、「えー、僕たちは、ソーブランドをやります」という問題発言をして、そのことにひどく私が傷ついた……というところから話をすすめた。「性風俗にかかわる女性たちの痛み」ということについてどう考えるのか問いかけてみたくて、雑談風にすすめた。大阪の浅井さんの実践にもあったように、やはり、「好きでやってる仕事だろう、男ばかり責めるのかよオ」とか、「なんだ、俺たちに説教しようってのか……」とか、「女だって気持ちいいから、やってるんだろ」などが出てくる。でも「好きな女がそういうことをしたら、やっぱりイヤだよな」「えー、じゃあ、そういうじゃない人なら、やっていてもかんけないの……ホントにそう思うの？」と私。女子は黙ってじっと聞いている。

実習中などかなり平気でAV（アダルトビデオ）の話が出てくるので、わざと、先日テレビで見た、AV女優とその監督をめぐる金銭トラブルがあった話をもちかけた。その女性Hさんは、インタビューの中でこう言っ

た。「私は、この仕事を選んだときから、お金とひきかえに多くの友達や親を失った。そうした大切なものとひきかえに得た三千万円を、みすみす、だましとられたことに黙ってられない」。

内容はあまり詳しく知らないが、私は、女優Hの、大切なものを失った悲しさの代償というところをイメージしてほしいために、この話を使ったのだが、生徒は、あっさりと、「監督Mが悪い！」と片づけてしまった。なかなか切り口が定まらない……。

◇ ◇

次に、浅井さんのロリーとエリックの「デートレイプ」をプリントして、使ってみた。「ホストになってやる」と血気盛んなMまで、この文を堂々と読まされることに閉口して、というより恥ずかしさがあるようで、真面目に目を通さない。茶化して読みあげる男子もいるが、声は小さい。

二人の行動について、考えを述べてもらった。が、やっぱりあっさりと、「一番悪いのはエリックで、だけど、その気にさせたロリーだって責任がある。こういう状況で、男に抑えろというほうが無理」とのこと。やっぱり

出てくる「男性の性欲は本能だから、仕方がない」「女性も気をつけるべき」論。ここで、女子にもがんばってもらいたいのだが、なかなか勇氣が出ないようだ。この先に進めるのはちょっと無理がありそうだ。

それから一言。「先生、よくわかかんねーよ。日本人の感覚にあわないんじゃないの、アメリカの話だろ」。そうそう、私もそう思って、別にプリントした河野美代子さんの『さらば悲しみの性』より抜粋した、十代で中絶する少女たちの言葉の数々……。 「ことわったら、彼がかわいそうだからセックスした」という部分……。人間とのふれあいに渴いた少女たちが、惜しげもなく捧げてしまうあり方……。 そうした、自己犠牲を美しいとする価値観に触れることなく考えていくのは、やはり無理がある。その話をしたら、Kが「オレ、けっこう彼女にくくしてるぜ。けど、女ってそれがわからないから、つけあがるんだよな」「そうだよ、こいつ、オレのやさしさがわからないんだぜ」と、Uがクラスにいる彼女のHに向かって言い放つ。「何よー」と、二人が言い合う姿に思わず苦笑。「ちょっとまってよ、男の人がやさしくしてるって言うけど、それって、女の人にとって、やさし

さじゃないから、伝わらないんじゃないの」と思わず私。Hが「そうだよ!」。ちょっと周りがシラーっとしたが、こういうハプニングが起るのがE組の良さだ。

◇ ◇

このクラスは、よく言えば、元気のいい男子が五人位いて、おとなしいのはやはり五人位だが、全員、とてもチームワークがよく、遠慮ということが似合わぬ、いわゆる、体を動かし、良いも悪いも仲間で楽しんでしまうインテリというには程遠いタイプばかり。だから、理屈っぽいことはイヤがり、感覚でピタっとこないと話がすすまない。

女子は、この男子の姿にあきれていながらも、楽しんでるようで、触らぬ神にたたりなしといったところ。そして、愉快だったのは、河野さんの本も見せたところ、それをとられてしまい、口絵の出版写真で、二人の男子が大騒ぎした。「先生、子供が出てくる時、こんなに広がるのか、すげーなあ」「そうだよ、なかなか広がらなくて苦労したり、場合によって一部が裂けてしまうこともあるよ。女の人は大変なんだよ」「うえー、いてえ!」と、思わず顔をしかめて、おしりをおさえるU。

そのあと、「男らしさ、女らしさ」というテーマに入っていた。画用紙にイメージとなる言葉をそれぞれ並べたものを見せた。男らしさのキーワードを見ながら、「全部オレにあてはまるじゃん……」なんて笑う者。「やっぱり、男のスポーツはサッカーだよな」「先生、着物っていうのはちょっとちがうよ。それから、胸が大きいってのも入れてほしいよな。あ、そうそう料理のうまい女は最高だよな」と言いたいことを言う。

「でもね、男らしさのキーワードの中には、男というより人間としてこうありたいという内容がいっぱい出てくるよね。今、女の人があることに気づいて、どんどん積極的に押し付けられた女らしさを否定して、人間としての自分らしさを目指しているでしょう……」

「でも先生よう、オレが古いのかもしれないけど、明治の頃の女のように三歩下がって歩くっていうのが本来の姿だって思うぜ。女からあーしろ、こーしろって言われると、頭にくるんだよな。男にしかわからないと思うけど」

そろそろ時間がなくなる。まとめようもなくなってきた。後半になって、それまであまり発言してなかった、

クラスでも乱暴なイメージが強いTが、「オレは女なんか好きじゃない。やっぱり男の世界がいい。結婚なんかしない」と発言した。そして彼は、終わったあと、私のところを通り過ぎるとき、こう言った。「先生、人それぞれだよ、先生の考えを押し付けてもしょうがないよ……」ウーン。なかなか核心に迫れないなあ。課題は次回に持ち越した。

おまけがつくのだが、その後、五・六時限に、被服の授業がある。E組で、じっと傍観者でいた女子がこの授業をとって、昼休みに感想を聞くと、「先生みたいな考え方があの子たちに伝わるとは思えないよ。あいつらには、何を言ってもムダ！変わると思ったら、彼女がそういう考えになって、はっきりイヤって言ったときだけじゃないの」とのこと。

彼女は、その前の週に『アンアン』で特集した、自らの裸を篠山紀信に撮ってもらおうというページに夢中だった。女性が自らを解放する一つの契機としてヌードになる。その誇りと美しさに、ホーっとため息をついていた。彼女もまた結婚したくない女の子だ。

E組の女子は大きく三グループに分かれるが、二グル

ープはあまり男子と話そうとしない。男女が意見を交換し合うムードはまだつくりにくい。

次の週は、私の方がエネルギー不足で、調理実習。女子は性の授業を期待している子もいたが、私のエネルギー不足は納得してくれた。近くの安い魚屋から新鮮なサシマと野菜を買って来て、かば焼き、スープ、ごまだれあえを作った。三枚おろしの見本を示す時、私はうかつにも指を切ってしまい、ブーブー言われる。材料を家から運ぶの大変だったのよネ。(いつもは近くのスーパーの配達ですが)。

男子は、体育の授業の後の実習をとて喜んで。とにかく、ごはんをつくって食べたいのだ。しっかり序列らしきものがあり、三枚おろし、野菜を切る役はリーダーが握っている。が、ごはん炊き、だし汁づくり、それぞれ役割がいやではなさそう……。気を抜くと、卵を奪われ、勝手に調理されたりする。それにしても、男の子は汚しながら調理するので、いつも私に言われている。「いったいこの始末は誰がするの？ まさか女なんて言わないでよね！」

◇

◇

そして、翌週。いよいよ、「愛と性パートⅡ」。スウェーデンの平等社会、そして、妊娠、出産のビデオを見せる。これもあまり熱心でない。女子はほとんど寝ていた。(一度見せたものだから) 動機づけをしないまま見せるビデオでは、効力が薄いようだ。男子は……一人だけすごく集中してみているS。「おもしろい？」とたずねると、「オレ、NHKでやったのを見たから……こういうの好きなんだ」。

後半は、セックス観について、女子高校生の四タイプの意見を読んでもらい、一人ずつ感想を聞いた。女子は、やはり一年の時に答えているその意見もあとで紹介してみた。男子の意向に従ってしまう、または、結婚に有利だから処女でいたいというタイプに対し、「この女は、弱いよ、きつとあとで後悔するぜ。結局こういうのが別れるんだよ」。

また、性に対し開放的であったり、スキンシップを楽しまたいというタイプに対し、「こういう女は、そのうちアダルトに走るぜ」「この女には愛がない」「え、もう少し説明して」「操だよ、操」と、黒板に字を書く。「そーいえば、隣にいる中学生、みさおちゃんだったっ

け」(おっと、脱線しそうになる)。

このあたりから、日本の女性に求められている貞操観念について話せるだろうか……。持って来た山口百恵のカセットをかけた。女子は一年の時間いているから、「先生、またあー。もういーよ」。だけど、Wが「あつ、オレ山口百恵好き」「先生、こいつの部屋に山口百恵のどっかいポスターがあるぜ」

♪あなたに女の子の一番大切なものをあげるわ——……。一緒に歌うM子。模造紙に書いた歌詞を貼ると、「先生ー、歌詞なんか貼るなよ。そういうことに燃えちゃうんだよなあ、この先生は」と苦笑している。

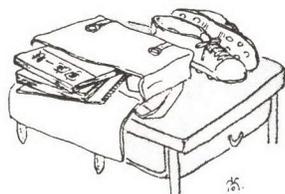
女の子の性が、「あげる」とか、「捧げる」とかなどという言葉で表現されていることに疑問を投げかける。けど、反応はいまひとつ。迫り方が今回はまずかったかな……。

最初の授業で実は、前々回のパートIの気になる発言を投げかけてみた。そのとき、Uが「いてーっ」とおしりをおさえたシーンも話した。こうして、女性の精神的、肉体的な痛みをイメージすることが、やさしさにつながるのではないか……。という話をして、私の妊娠出産体験

の話もした。けっこう真面目に聞いていた。が、Uは、最後に、「オレは、彼女が子供を産む時になったら、その時になつたら考えるよ」。どうやら、自分の言動に勝手に価値づけされて、話をもっていかれたことが気に入らなかつたらしい。それもそうだ。

それから、前回の授業での発言を振り返っているとき、突然Iが、「レイプの場合、一番罪が重いのは、複数の場合で、しかも、一人目は軽い。二人目から重くなる」と発言。「男はこういうことを知らなくてはいけない」などと言う。

やはり、女性のナイーブな心情が伝わったとは思えない発言だった。どう言って伝えたらよいか、そのことを直接女子生徒から聞いてみようと思った。



オホーツクの

潮風荒く……

編5
外の番そ

夫婦はやっぱり同一姓がいい!?

江口 凡太郎

□突然ですが

先日、私は結婚しました。といっても、相手は大学時代の同級生で、小学校教員をしていて、お互いに年度途中の転勤はできず、別居状態です。いわゆる「結婚式」と祝賀会（北海道では披露宴とは言わない）をしただけで、実生活はほとんど変わっていません。

今回のことで、考えさせられることがたくさんありました。「ご両家」に代表される「家」制度、名残というにはあまりに多くのところから出てきます。「お婿さん、お嫁さんとして、これからは……」という言葉に続く期待される役割像もなかなか強烈です。私たちなりに、本質に関わることから、細かいことまで、いろいろ頑張っ

はみましたが、「祝い事」だけに差別だ！問題だ！と言いにくく、運動論の直球勝負より、変化球勝負の難しさを学ぶことができました。

この結婚で二人で話し合った重要な事項の一つが「姓」の問題です。私は、「別姓がいい！」とズバリ相手に提案しましたが、彼女は「夫の姓と決めつけないけど、夫婦はやっぱり同一姓がいい」と言いました。二人で福島瑞穂さんの本を読んで、勉強もしました。「婿養子」とまわりから見られることを覚悟で、彼女の姓にすることも考えました。しかし、私の父が「逆玉と言われる、妻の姓にするならこの結婚から一切手を引く」と激怒。たとえ父親を押し切っても、彼女の実家の近くで暮らしているのも、彼女の家のほうのしがらみと闘わねばならないことも事実です。このような話し合いをぎりぎりまで重ねた末、結論は不本意ながら「夫」の姓である「江口」となりました。

しかし、担任を持っている彼女にしてみると、子供たち突然「江口先生」と呼ばれるのは抵抗を感じたようです。今年度中は旧姓を使用することを校長に申し入れ

ると、それは、すんなりと受け入れられ、半年間ですが、彼女は仕事で通称を使用することになりました。

ところが、今は事実婚なのです。式の日には婚姻届を出す予定でしたが、お互いにもあまりにも忙しくて、書類を取り寄せる暇がありませんでした。そのまま一ヶ月近くたってようやく、明日にも届出をする準備ができましたが、改めて、必要書類に目を向けると、記載事項のあらゆることから様々な差別が見えてきて、少々気が重いです。

□お祝いの品に囲まれて

彼女は知人から素敵なエプロンを一枚いただきました。「一枚しかないよ」と彼女。「僕でしょう」と私。結局そのエプロンはタンスの奥にしまいこんだままです。ちなみに、私たちの関係をよく理解している友人はエプロンを二枚くれました。

日常生活や善意の気持ちに潜む、性役割分業観や性差別は、利害関係が伴わないだけに、変えていくのが難しいなあと、今回いろいろなところで感じました。

□二枚のエプロンで

今は週末ですが、二枚のエプロンを活用して暮ら

しはじめました。二人で共同で炊事するということもかっこいいのですが、「洗濯物はしわを伸ばしてよ！」と彼女。「ゴミはちゃんと分けてね」と私。

これまで違った生活スタイルをしてきた二人が、それぞれ自分が「主体」となって暮らしを作ろうとするので、小さな衝突がたくさんあります。

「先生の奥さんはかわいそう！だって先生、ゴミとか添加物とかうるさそうなんだもん」と、ある女子生徒が私に言いました。「大丈夫だよ」と軽く受け流していたのですが、生徒の危惧したとおりになっているところもあって、複雑な心境です。

生徒と話をしていると、「夫に尽くしたい」という女子生徒でも、「家事は夫も手伝ってほしい」と多くは考えています。でも、あくまでも、「手伝い」までで、夫が家事の「主体」にはなってほしくないと考える女子生徒が多いようです。

私の連れ合いも「リーダーシップが取れない！」と苦笑い。くらしづくりも、しなやかに、頑張りたいと思います。

(紋別南高校家政科)

シコふんじやった

蔵本佳子



九月一九・二十日と二日間文化祭がありました。今年は三年生の担任で、彼らにとって最後の文化祭になるので、何か思い出に残るものを、というこゝとでやった取り組みが、私にとって記録しておきたい内容でしたので、そのことを書かせていただきます。

この取り組みは、七月号の「学校―絶望? 希望?」の企画に関わってきた者としての思い入れもあって、特に、私の内発的な動機づけに『We』が一役買っていたことも付け加えておきます。やった内容は、クラス劇『シコふんじやった』。このタイトル、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、相撲を題材にした映画です。今年七月に発売されたばかりのビデオから脚本をおこしまして、私が積極的に仕掛人になりました。本当をいいますと、クラス三十九人の内、劇をやるうと集まった人数はほんの五〜六人。放課後、ミュージカルやらテレビドラマやらワイワイと企画したのはよかったけれど、ホームルームで猛反対。「もうダメだ」と

やる気をなくし、何かゲームのようなもので盛り上げようとしたのですが、時すでに遅しで、企画不十分のため、うちのクラスの出展場所がもうなかったのです。生徒部の担当者の目論見で、ミニシアターで劇をやるしかなくなっていたのでした。この時すでに夏休みに入ってしまった、何をやるのかクラス全体がわかっていないまま、登校日だけを決めて解散になりました。

演劇など素人の私が何をできるか……このまま最後、クラスで大したこともしないうち終わってしまうのも心残り……。まあ生徒の自主性に任せて何かを作り上げてもらうのもよかったです。が、担任の目からみて、どんなことができるか予想がつかみませんでしたので、それならあまり教育的にならずに、彼らと一緒に楽しめる形でやるだけのことをやろう……と。

『シコふんじやった』をようやくビデオ屋から借りてみることできた時は、神のプレゼントかと思ったくらいです。これしかないと思いました。セリフの楽しさ、相撲という設定の意外性、舞台で相撲がやれるハズニングへの期待……いろいろな意欲がかきたてられ、とにかく、できるだけ多くの生徒にこれを見せよう、同時に、この夏に劇に追い込む準備をすませておくことにしました。

脚本は時間がないので、このごろ得意技になっているテープ起こしを生かして私が作りました。次に、まわし作り……周りの先生のアイデアで古いカーテンと新聞紙で、結構質感のあるいい

まわしが、生徒によって十数本できました。そして、電話をかけたまくって配役の決定！「いやだー」と言いながらも、三年生の強み。恥をかいても三年ならば……。

高三の生徒に対し何もここまで教師がやらなくてもと思われる方もいらっしやあるでしょうが、今時の高校生は、コンパや商業主義のお膳立てにはのりやすいけど、苦勞して手づくりのイベントをつくることに消極的です。しかも、教育的配慮のやらせをすごくやがります。特に、私のクラスの生徒はそうでした。だけど、「何かをやりたい！」という気持ちは感じましたので、私の教師としての力量とか評価をあまり意識せず、ダメでもともと、無から一体何ができ上がってくるか、「期待し過ぎず、かつ、あきらめず」の方針で生徒の自然な意欲を待ちながら進めました。何しろ、本番は、九月十九日。練習時間どころか配役が九月十日くらいになってももめていて、絶望的な気分にもなりました。最初やる気のある生徒まで「こんなクラス……」と帰ってしまふことも……。ちょうど就職試験の時期でもあって、何人かが公欠で抜け、まとまって練習する時間もとれず……。それでも、九月に入って初めての週五日制の実施される十二日の土曜、十五日の祭日に何人か集まって作業をすることができました。「あきらめず、とにかく、やれる人だけでも粘り強く、楽しもう」と呼びかけて。

十九日の本番は、最初大入りで外野のヤジが飛び交う中、一見盛り上がりが見えましたが、それは、とても団結のたまものと言えるようなものではなく、次第に観客も飽きてきて、観るほうもやるほうも疲れてしまうというものでした。五十分の予定が九十分位かかってしまったのです。

私も、この日はさすがにつらくて、困ったのですが、でも、その後突如として、「このまま明日を迎えたくない」という一人一人のやる気が出てきました。脚本に十数人が車座になって集中し、生徒たちが編集し直しを始めたのです。疲れ切った主役の男子も、それを見て再び活力が湧いたと言っていました。他のクラスの女子がチアガールの踊りを振り付けし直してくれて、音楽も夜遅くまでかかってとりなおし……。「クラス参加なんて」と振り向きもしなかった女子まで熱心にやっていました。この時間、一番幸せだったのは私であつたと思います。

二十日は午前中の公演でしたが、前日のヤジ軍団の姿はなく、内輪うけではない、生徒たちの楽しそうに演じる姿に、私はホッとしたのを感じました。この日は私も出演しました。スコート姿でチアガールになりました。文句なく楽しめました。最後のセリフ「私もシコふんじやった！」で、一斉にクラス全員舞台上に入り、クラッカーを鳴らして終わりました。一人一人の満足した顔。(写真は主役の女の子が土俵入りするシーンです。彼女の明るさがクラスの支えでした)。

どこにでもある行事の取り組みをこんなに長々と書いたのは、実は家庭科のテーマを学校で生かしていく方法をその中に探りたかったからです。

「家庭科のテーマをいかに血肉化していくかは、人と人の関係の親密度によって違ってきます。「違いとつきあう」ということを無意識の中で人が内面化していくには、やはり、

集団の活動の中で、その人の魅力を発見していくことから始まるのではないか、「気づかなかったことに気づく」そのときめきを味わうことにあるのではないかと思うからです。教師が生徒を指導するといふやりやしから脱して、人と人が感情をぶつけあい、何かを楽しみながらつくり出していく、そのことを大事にしたい。やりたくない心理状況にある生徒をむりやり引っ張り込むことはしないが、でも、「やろうよ」と呼びかけ、神に祈るような気持ち



ちで日々の状況に対処していく。私も一緒に参加する気持ちでいることを伝えながら。

九月九日に開かれた学年の水泳大会でも初めて生徒と一緒に泳ぎました。年齢には勝てませんでしたが、私が楽しいと思えないことを強要するのはやめよう。

こう考えるようになったのも、七月号の編集が私にとって大きかったからです。学校の矛盾や深まる消費社会現象の中で、人の関わりを避けながら魂の充実を求めている生徒たちに、私がどう関わっていけるのか考えていきたいと思っています。

学校模様2

小さな闖入者

納巳考志

今日はいつになく、集中して静かに授業を受けているな、と思った途端、教室の一角が妙に騒がしくなり始めました。いったい何事が起こったのでしょうか。

覗いてみると、小さな羽アリののような虫が一匹入ってきたのです。生徒達はキヤーキヤー言って、授業どころではありません。そんな騒ぎを知ってか知らずか、小さな虫は生徒の足元をゆっくり這っていきます。虫が移動する方向に騒ぎが広がり、足をじた

ばた踏みならし、体をそむけて「センサー早くこの虫をトッテヨ
ー！」と女生徒の大きな叫び声が教室に鳴り響きます。でも、叫
ぶだけで自分たちで何とかしようという気配はありません。それ
にしても、本当にかわいらしい虫なんですけど。

生徒の足に踏みつぶされないだろうかと、虫のほう惊心にな
ってきます。生徒の反応があまりにも大きさに見えたので、それ
に、こんなちっちゃな虫をまるで悪魔みたいに排除しようとする
気持ち、なんだかとても悲しくなつたので、つい意地悪く「そ
んなに毛嫌いしないで虫と一緒に授業を受けようよ」って言って
みました。したら、「冗談言わないですよ！」ってムキになって、
思いつきり睨まれてしまいました。どうみても、虫よりも彼女た
ちのほうが怖いように思えるのですけど。

それほど小さな虫なので、つかまえようにも苦勞してしまいま
す。生徒の足元にかがんで、そのうすい羽をつまもうとすると、
「キヤー！」と大きな叫び声が頭上で響きます。私のほうが驚い
て、思わずつかんだ手を放してしまいました。叫び声は「虫を私
に近づけないで」という意味だったらしいのです。これで、ゆう
に十分は授業がつぶれてしまいました。

気持ちよく晴れた日に、生徒を学校の裏の林に連れ出したこと
がありました。野草探しをやったのです。とてもいい企画だと思
ったのですが、生徒は林のなかに入ってきました。林の入り口あ
たりでたむろして、「ギヤー、カエルー」なんて叫んでいます。

悲鳴というより断末魔の叫び声のようです。小さな親指大の雨蛙
でした。これじゃー、生徒の声でカエルのほうがショック死しそ
うです。草のあいだから、ミミズなんて出てくるともう大変。大
騒ぎになります。

ふだんは、私なんかが見てもブルブルって身の毛のよだつ、怪
奇ものの漫画なんかを平気で見ているのですが、テレビや映画で
もそうですね、実物の虫のほう彼らにとつては、ずっと怖いよ
うです。つまり、どう扱っていいのかわからないからなのです
でも、作りものの中だけで生きている現代っ子たちが浮かん
できます。人と人との関係、そんなものが経験できなくなっている
ように思います。

障害者の問題とか、外国人との問題とか、老人の問題とか、そ
んなことにも関係してくるように思います。ふだんの生活で隔離
されてしまっているの、身近に接する機会がないのです。だか
ら、怖いという気持ちが先立ってしまう。それが差別の問題にも
広がっていくような気がします。自分とは違う世界の人、そんな
感じになってしまうのでしょうか。

今の社会は、子どもたちにとってよくない環境が多くなりすぎ
ているように思います。学校もその一つだと思っています。だか
らといって、どうしたよいか、私も分かりません。子どもたち
の心のなかに、大切なものが育たなくなっている。そんな気がし
てなりません。

インタビュー

聞き手
間瀬中子

複眼でみる

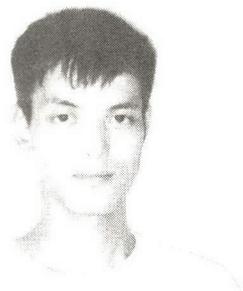
— 鍛冶屋さんは知的好奇心を刺激する？ —

関根 秀樹さん

’92年の夏に行なわれた「いわき子どもといのちの祭り」に参加した折りに、古代の火おこしや楽器作りのワークショップの仕掛人をやっておられた関根秀樹さんと出会いました。関根さんが何か特に子どもたちに働きかけているわけではないのに、いつも何人かの子どもたちが後をついて歩いていたのがとても印象的でした。

プロフィール

1960年福島県生まれ。和光大学卒。縄文人や先住民族の生活技術の復元実験的研究と石の文化史研究がライフワーク。体験型博物館のソフトデザインやパイナップル繊維の開発研究なども手がける。著書に『民族楽器をつくる』『竹で作る楽器』『原始生活百科』（以上創和出版）『フィールドアート・森の展覧会』（岩崎書店）など。



■火おこしの研究

間瀬 どういうところから火おこしの研究に関わっていったのですか。

関根 たまたま、偶然です。和光大学に入らなければ火おこしはやってはいなかったでしょう。和光大学に岩城正夫という先生がいらして、そのかたの影響です。

大学の同じ寮に住んでいた同級生が、岩城さんの授業をとっていて、毎晩僕の部屋に来て「面白い、面白い」と火おこしをやってみせるんです。それで、「俺にもやらせろ」といって練習しているうちにだんだん……。岩城さんの部屋に遊びに行ったら、部屋の中にいろいろな石器だとか土器だとか変な物がいっぱいあって、「変な研究室だな」と思ったのが始まりです。

岩城さん自身が非常に面白い経歴の人で、中学校の理科の教師を皮切りに十数回職を替え、最終的に大学教授になった人です。だから、大学教授の堅苦しさとか気取りというようなものはまるつきりなくなってるね。それがすごく居心地がよくて、年中遊びに行くようになりました。二年生になってから岩城先生のゼミをとって、その中で中心になっているやっっているうちに、先生の研究自

体に興味を持つようになって、原始技術史というんですけれど、技術の起源の問題を研究するようになったわけです。

岩城先生自身は欧米の文献は非常によく読んでいるけれども、東洋のものはほとんど触れていなかった。そこで、ぼくはとにかく朝鮮や中国や日本の文献を読みあさって、火に関係がありそうだと思ったら全部ひっぱり出して、毎週のように持っていきました。

ふつう大学教授というのは、弟子が新しいデータをもっていくと、それを基にして自分の業績として発表してしまうんですが、岩城さんは、突然、「これだけたまったら立派な論文になるから、論文を書いてみないか」とぼくに言うのね。そこで、論文を書く修行をさせられました。岩城先生はぼくにとってはずごく大きな存在でした。

■モノを作るおもしろさ

間瀬 大学時代はほとんど岩城さんの研究室で過ごされたんですか。文学科とうかがいましたが……。

関根 ぼくの専門は日本文学の古典だったんです。実は、

古典をやっているながら、また、別のところでデザインの勉強もやっています。生活デザインですけどね。秋岡芳夫先生（工業デザイナー・元共立女子大学教授）がやっていた「グループモノモノ」にずっと関わってアルバイトをしながら、同時に、岩城先生の研究室で古代の生活技術の復元をやっている、それで、留年したわけです。

間瀬 秋岡先生とはどうして出会われたんですか？

関根 それは本当に偶然でした。東京に出てきてすぐのこと、本屋で、毎日日本ばかり見てきました。そうしたら、たまたま秋岡さんの本を見つけて、「日本の手道具」という大工道具の本なんですけど、木工の世界というか、物を作る世界というのはこんなに面白いんだなと初めてわかりました。ぼくはもともと工作が大嫌いで、図工の成績は1でした。作業がとにかくのろいんです。作るのと自分が嫌いなのではなくて、図工の時間が嫌いだったんです。

だから、高校に入って、美術だけは死んでもとりたくないと思って音楽をとったんですが、そうしたら、それも1でした。それなのに、一番だめだった音楽と図工の世界で今、生きている。わからないものです。

秋岡さんの本の中に、とにかく楽しそうに木を削っている話や写真が一杯あるわけです。それで「いいな、やってみたいな」と思って、巻末に住所と連絡先と、月に二回ぐらい集まりがあってそこで飲み会をやりながらいろいろな話をする会があると書いてあったので、それにひかれて出かけて行きました。

秋岡さんは全然気取らない気さくな人でした。教えてもらうとか勉強するとかいう関係ではないんですけれども、酒を飲んで席やいろいろな所で様々な話をしてくれると、それがまたすごく面白くて……。

秋岡さんの家の中に無数の道具があって、それを見ているだけでも楽しい。年中行っているうちに、だんだんぼくも工作が好きになってね。大学一、二年の頃です。文学の世界では、もともと古典がすごく好きでした。

古事記、日本書紀、あと江戸文学とか。平賀源内が一番好きですね。古典の先生からは、徹底的に日本の文学の研究と方法を仕込まれました。文献をどう読みこなすか。文献の探し方、それから文学の研究の方法論。それはかなり緻密に、きちんと教えてもらいました。

さきほどの岩城先生からは、自然科学的なものの考え

方や研究の組みたて方というのを学び、秋岡さんからはデザイン感覚を教えてもらいました。

岩城先生のところで論文を書いたのは二年生の時でしたが、二年生と言っても、僕は三年くらい遊んでから大
学へ入りましたから、年はくっていました。

■とにかくよく遊びました

間瀬 何をして遊んでいたんですか？

関根 浪人の一年目は偽学生で東大の寮に居候して、予備校はほとんど行かないで、神保町の古本屋街とか本郷あたりをうろろろしていました。医学部とか、あと東京芸大。アルバイトもいろんな事をしましたね。土方もや
ったし警備員もやりました。

二年目は東京に居ると勉強しないというので、仙台にやられたんです。仙台では東北大の金属材料研究所とか半導体研究所とか、林竹二先生がまだ教鞭をとっていて面白かった頃で、宮城教育大なんかも出入りして遊んで
いました。

間瀬 親御さんの反対はあったでしょうね。それだけ好きなことをやってきて。

関根 でも、ぼくは高校を一回中退しているから、親もかなりあきらめていたみたいです。福島県の安積高校という郡山にある名門校から、地元の歩いて行ける学法石川高校へ転校してしまった。三年生の夏休み前に自分で勝手に手続きをしてね。

そのころはもう、安積高校はかつてのリベラルな名門校じゃなくて、完全な受験予備校になっていたんです。卒業するともらえる変なバッチとかメダルが、福島県ではステイタスシンボルみたいになっていて、それだけは死んでもいやだと思つて。

学法石川高校は当時、日本で一番喧嘩が強い学校で有名だったんです。日本中の不良校で退学になった連中が、来ます。福島県で一番古い私立の高校、もともと自由民権運動の政治結社からはじまった塾で、質実剛健で、それこそフロンティア精神にとんでいる連中が多かったんですよ。

■知的放射能を発散する人

間瀬 ところで、関根さんは、博物館のデザインを、ソフトの側から考えられるという新しいかたちのデザイン

のお仕事をしておられますが、そのあたりのきっかけはなんですか。

関根 ぼくは、子どもの頃、鍛冶屋の仕事をみていて飽きなかった。そういうのって、やっぱり好奇心を刺激されるんですよ。知的好奇心というのは、だれでも持っているし持てると思います。でも、中には知的好奇心を刺激する何かを発している人がいるんですね。秋岡さんと岩城さんとかがその最たる人ですが……。

ぼくはそれを知的放射能と言っています。そういう人がいると、そこに知的好奇心をもった人が集まる、集まっていろいろやっていると、一人一人が知的放射能を発散する人になってしまふ。ぼくはそんなふうにして、秋岡さんのような人がたくさん増えたら面白くなるだろうなと思っています。

間瀬 近代が忘れてきたものの中にこそ大事なものがあられるかもしれないけれど、ただ懐かしがるだけだったら一部の人の懐古幻想みたいで終わってしまう、でも、秋岡さんの場合はそうじゃなくて、手仕事という古いものを大事にしなが、新しいものを生みだしているようですね。

関根 ぼく自身が小学校から一貫して変わらない夢は、博物館と図書館と学校が合わさったような面白い施設を造る事です。

どこの博物館へ行っても、部分的に面白い所はあっても、全部が面白いというところはありません。最初は、美術館というのは僕の範疇にはまったくありませんでした。宮城県立美術館との関わりの中で、これは美術館もあつたほうがいいなと思うようになり、時々はコンサートなんかもしたほうがいいなと。だんだん頭の中では具体的になってきて、それを、あちこちの博物館のデザインをやる時に小出しに出していきました。

ただなかなか難しいのは建築する側の人たちにしても、あまりソフトのところにお金をかけるという考えがありません。特に、体験学習型の博物館を建てる場合は、人がいないとどうもならないのですが、その問題が今一番大きいです。もし、人材を育成したいと思ったら、多少感性のありそうな人を、二、三年の間、岩城さんとか秋岡さんの所へ研修にやればよいと思うんです。そういう所で研修してくれば、自分で何でも出来るという人が育ちます。ただそれに要するお金がどれくらいかかるかな

あ。二、三年の給料ですよね。でも、まだ形もできていないのに研修費としてお金をかけられる自治体がどれだけあるかということですよ。

昔はもともと時間に余裕のあるお年寄りが出て、その辺で竹細工なんかやっているところに、子どもが自然に集まってきて、自然に技術が伝わっていったんだと思うんですけどね。

ぼくが子どもの頃は、近くに老人ホームがあったんですよ。そこがかなりオープンなところで、老人ホームのじいちゃんたちが、うちに遊びに来てお茶を飲んでいたり、子どもたちもそこへ遊びに行っている遊んでもらったりしてたんですけど、今それは移転して山奥のともでもない所へ行ってしまったんですよ。隔離されてしまった。あんなったら交流なんてできっこないです。本来、異年齢間の文化の伝達がちゃんと出来ていれば、特別、公民館なんかが堅苦しい講座を組まなくてもすむわけですよ。

■文化の枠をはずしてみると

間瀬 日本の文化は、明治維新の時に一回否定されて、

もう一度、第二次世界大戦の後にダメージを受けましたね。でも、残してもいいものがたくさんあるように思うのですが……。

関根 そうですね。例えば、和太鼓という楽器は、単なる道具ではなくて、自分の体の延長で、たたく時の動きの美しさをすごく大事にします。武術で、「残心」といって、居合で切った後に敵が倒れたと確認したあと、ほんの二、三秒ピタッと止めて気を残しますが、これを音楽の演奏の時に取り入れると形も決まるんですね。和太鼓の人達はこれをやります。

西洋の楽器をやる芸人の人たちで、動きがよくない人たちが多いので、東洋の武術や茶道をやることをすすめたりします。すると間が取れるようになって、演奏そのものが変わってくるんですね。

西洋では間という概念がないんです。日本の文化の中には、お茶一つ飲むのにもそういう間とか動きの型や心構えを大切にしているものがあったんですね。まだまだ、ぼくの好奇心を刺激されるような面白いものに、これから出会っていけそうな気がします。

アンデルセンに「野の白鳥」という童話がある。「白鳥の王子」とも訳されている。あの国の王様に十一人の王子と一人の王女がいた。王女の名はエリサという。そこに新しい母親が来るが、大変いじの悪い人で十一人の王子を鳥にして追い出してしまふ。悲しみのあまりエリサは城を出て、白鳥の姿になった兄さんたちに会う。夢の中に出てきた仙女が王子たちを救う方法を教えてくれる。いらくさを糸にしてくさりかたびらを編む、すっかり仕上げるまで口をきいてはいけないというのだ。エリサははじめ、他国の王がその姿に目をとめ城につれて帰る。依然として口はきかない。ついに魔女として火あぶりの刑に処せられることになるが、刑場に着く寸前十一羽の白鳥がやってくる。「するとかのじよ



現代衣生活考

むらき数子

パジャマのゆくえ

○義務教育と寝巻

明治の義務教育発足以来、裁縫科で、家庭科で、女生徒は寝巻を縫わされてきた。(本稿では「寝巻」⇨寝る時の服、「ねまき」⇨ゆかたなど和服式の寝巻の意味)

一九五八年以後、学習指導要領は「ひとえ長着女物(⇨ゆかた)またはパジャマ」に「休養着」という妙な名前をつけた。平面(和裁)か立体(洋裁)かという被服構成理論はどうあれ、寝巻など家で着る服は女が縫うものだ、というのが社会を支配する男の感覚だった。



○ねまき⇨休養着⇨パジャマ⇨日常着

一九五八年、東京の私立女子中学生だった私は、ごていねいにも、ゆかたとパジャマの両方の実習をさせられた。同じ年、栃木県的女子中学生九〇三人は、ひとえ長着を所持する者が七九%、パジャマは二三%。寝巻が乏しいだけでなく、自分専用の寝具を持たない生徒が二三%もいた。

六〇年代初めの牛込ちえ達の寝衣調査を見ると、全国各地で「男は昼は洋服、夜は和服。家庭の女は昼も夜も和服」で暮らしながら、子どもには男女とも「昼も夜も洋服」という育て方がひろまっていた。十六―三五歳の女性では、寝巻はひとえ、ネグリジエ、パジャマが三分している。彼女たちは、昼間、洋服で暮らし、ヒラヒラの下着を取り入れた世代である。

寝る時に寝巻を着るのはあたりまえのように思うが、「夜寝る時に寝巻に着がえますか」という項目を設けた調査もあったように、全国一律の習慣ではなかった。

一九一三年生まれのKさんは、大正期の東京下町の長屋で育った。子どもが皆、小卒で就職した家庭で、「着

がえもしないで寝るような『ずつなし（だらしのない者）』では困る」としつけられた。だが、農村では地主でも下着のまま寝る人が多かったようだ。若い頃からの習慣で、高齢になっても下着のまま就寝している男性が五〇%という八四年の新潟県の農村の調査報告もある。

義務教育は、全国に、寝巻で寝る習慣を奨励し、六〇年代以後、パジャマを普及していった。

七〇年代初めには、人に見せないからと最も後回しにされてきた寝巻にも、高度成長が及び、一人当たり所持枚数が二―三枚。着用習慣とともに、寝巻のままウロウロするなんてだらしない、という価値観が「女らしさ」として、女子に対してしつけられてきた。

既製品のパジャマが寝巻の主流を占めるようになったこの頃から、製作させても着用するのは半分以下、という教員の嘆きが多くなった。が、文部省は七七年改訂の学習指導要領の被服製作に、依然としてパジャマ（休養着）、スモック（作業着）、スカート（日常着）を例示した。

○パジャマ離れ

八〇年代に入った頃から、若者の下着の省略、カジユアル化、パジャマ離れが目立ってきた。

八三年の中橋美智子らの調査では、東京の中学生の男子の三割、女子の一割がTシャツで寝ているし、冬にはトレーナー。

業界も、トレーナー、スウェットスーツ、スキーパジャマなどを、寝る時だけでなく、起きている時も着られるホームウェアとして売られるようになった。

八八年の稲垣和子らの調査では、二十年間に、京阪神の女子学生は就寝時に、パジャマ着用者は五%減り、ゼロだったトレーナー着用者が四四%にもなっていた。

私が一九八九年に行ったアンケートの結果を紹介しよう。

五〇代以上の女性二九三人は「現在寝巻には何を用いていますか？」と質問されて、九九%が「パジャマ・ネグリジェ・浴衣」という寝巻専用の服に○をつけた。

一方、四〇代中心の女性に「お宅では寝巻には何を用いていますか？」と質問したところ、「Tシャツ・トレーナー・昼のまま・その他」にも○を付けた人が、九五世帯、三四八人の二五%に達した。女性の二一%、男性

の二九%である。

寝巻専用でない服で寝る率は、小学校高学年から母親離れとともに高まり、高校生で過半数を越え、一八歳以上の未婚男女では六一%になった。

男子は、小学生では、着替えるのが面倒だから。中学生になっておしゃれに目覚めると意識的に寝巻を拒否し始める。

女子は、小学生の時は九一%が親に従って寝巻を着ていたのが、中学生になると五六%が拒否、反抗は高校生へと広がり、十八歳を過ぎると親と同居でも六六%がトレーナーなどで寝るようになる。Sさんは、親の家では「寝巻のままウロウロしないで」と母親に言われるので、「寝巻(パジャマ)↓普段着(ジーパン)↓外出着」だったが、独立後は「トレーナー↓外出着」。

ベッドという名の万年床で育ち、深夜まで外出する若者は、寝巻らしい寝巻を嫌がる。着替えるのは面倒だし、寝る時もコンビニへ買い物に出る時も同じ、ラフな形態素材のTシャツ、トレーナーなどの「部屋着」。シルクのパジャマやゴージャスなネグリジェも多様なファッションの一部である。

ジャージ姿で朝食中の息子に聞いてみた。

「君が今着てるのは、寝巻？ 部屋着？ 普段着？」

「氣イ使わない着」。

労働を免除されている若者の服は、「氣イ使う着」と「氣イ使わない着」の二種類らしい。

○着替えてますか？

パジャマで育った現在の成人は、圧倒的に「寝巻Ⅱパジャマ」と思っているが、実際に朝晩に着替えているのだろうか？ 私のアンケートでは――

女性一〇八名の八五%は寝巻に着替えている。無職の母親は、どの年代をとっても寝巻に着替えている。女性で、トレーナーでも寝ることがあるのは、一六名、一五%、十代以上の子を持つフルタイム勤務の母親が多い。

フルタイムの母親たちは、まだ原則として寝巻に着替えているが、「寝巻らしくない」デザイン素材を選ぶ。なぜなら、朝は、寝巻のまま、食事の用意などの家事をして、着替えるのは出勤直前だから。時間と競争する彼女たちの「寝巻↓労働着(＝通勤着・外出着)」の生活にとって、普段着は平日の帰宅後と休日だけのもの。

「寝巻↓普段着↓外出着」と着替えるのは、「パジャマのままウロウロするのは大っ嫌い」というフルタイムマーの中の少数派や、非常勤・無職などで外出時刻の不定な女性のようなだ。

夫たち八三名のうちでは一三名、一六%が寝巻専用でないトレーナー類、下着のままや、夏には裸で寝る。時には酔って着替えないまま。寝巻を着て寝ている八四%の男の妻たちは、子どもから拒否されても夫にはせせと着せ続けているわけだ。

勤め人男性では「寝巻↑↓労働着」が平日のパターンで、「普段着⇄休日着⇄休養着」。

昼の労働着のまま寝てしまう、という中には、酔って帰ってそのまま、というのとは異質な例がある。

アンケートの時には、パジャマやトレーナーで寝ていた学生Y君、銀行に就職、寮生活を始めた。「毎朝七時に寮を出て、目一杯仕事、寮に帰るのは夜十一時過ぎ、週に二、三度は『討ち死に』なんですって。服も脱がずにベッドに倒れ込んで、朝まで寝ちゃう、それが『討ち死に』だそうよ」と母親のYさん。

○「日常着」って何？

「時短」のかけ声の陰で、長時間過密労働が進行し、「カローシ（過労死）」が国際語となった日本。「二十四時間戦えますか」と、ドリンク剤片手の無償残業「討ち死に」を強いられる勤め人男女には「休養着」も「日常着」もない、あるのは「労働着」だけ。

学習指導要領の八九年改訂で、パジャマという例示はなくなったが、「日常着の製作」として、依然として普段着を縫わせるよう指示する。家庭科教員は、低下する一方の子どもの技術に苦しみながら、意欲をひきだそうと、パジャマやスカートでなくパーカーやパンツを教材に試みている。

男女一緒に、パーカーを製作中の中学生達に、「できあがったら、着ますか？」と聞くと、異口同音、「着ない」。あふれる既製服で眼が肥え、バイトで懐の温かい若者には、手作りはけっこう楽しいけど、かっこ悪くて着る気にならない。彼らを扶養している親世代には「日常着」を手作りしたり着用したりする余裕がない。

老いも若きも、有職も無職も、「日常着」を楽しむ余裕のある社会になって欲しいものだ。

地域の暮らしと

家庭科教育

石川尚子

五、豆を食べる

(1) 暮らしのなかの「マメ」

私たちが日常何気なく使っている「マメで暮らす」という言葉の「マメ」にはどのような意味が込められているのだろうか。広辞苑のマメ(忠実)の項には「①まごころがあること。まじめ。誠実。②労苦を厭わずよく勤め働くこと。③身体の丈夫なこと。達者。息災」とある。その言葉を食品の豆に置き換えて、マメⅡ豆(大豆)としたのは、先人たちが体験から獲得した知恵といえよう。いうまでもなく大豆は、畑の肉といわれるほどの栄養を持っており、貯蔵性・加工性にも優れ、動物性たんぱく質をほとんど摂れなかつたかつての人々にとって、マメに働くために大切なたんぱく質性食品であった。

しかも、医療が不十分で、経済力も乏しかった時代の健康は、食物や薬草に頼らざるを得ず、豆がことのほか

重視された背景には、そうした理由もあったであろう。この稿では、大豆と暮らしについて考えてみたい。

(2) 日常食と大豆

大豆は消化の悪い食品である。そこで、様々に手を加えて消化をよくし、風味を高める工夫がなされている。

豆腐、油揚げ、きな粉、納豆、おなめなど、たくさん加工品があるが、特に、日々の食卓に欠かせなかつたのはみそである。各地それぞれの特徴あるみそが、地域の暮らしに及ぼした影響は大きい。「何はなくてもみそは煮ておけ」と不時に備えて大樽(四斗だる)に何本も漬け込んだり、「手前みそ」とわが家独特のみそ自慢をしたり、みそにまつわる言い伝えや民俗は豊かである。

調理の工夫をみても、火を使わず胡麻や香り高い野菜を用いた「冷や汁」、貴重な油や砂糖をうまみのもととした「野菜の油みそ」、その他「みそだれ」「みそづけ」「みそ煮」「豆みそ」「みそむすび」「みそ饅頭」等があり、みそ以外の大豆料理としては「炒り豆」「煮豆」「呉汁」「打ち豆」などが、おかずやおやつに利用されて、地域独特の大豆食文化が形成されている。

(3) 年中行事と大豆

日常の食生活とはまたちがう大豆食として、『ふるさと唐子の暮らしと遊び』から2例を引用してみよう。

「二月三日は豆まきだ。鯛の頭をひいらぎにさして、いろりにたてておくと、おばあさんが、きゆうりの虫いなくなれ、なすの虫いなくなれと言いながら、ペッペツとつばをはいて、それをとぼ口(玄関)にさし、鬼がうちのの中へはいつてこないようにした。夜になって福は内、鬼は外と大声でさけんで、豆を勢いよくまいたもんだ」

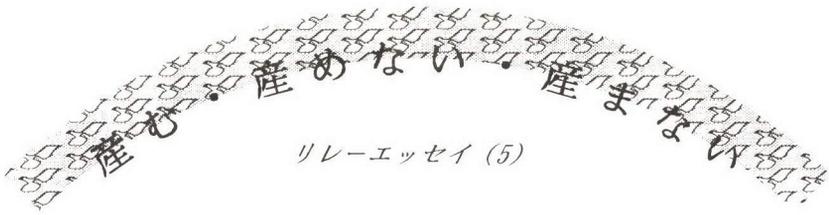
「二月の初午には『スミスカリ』つてものを食べたんですって。これは大豆を炒って、上の皮をとったものと、スミスカリオロシで大根をくだくようにおろしたものをうす味で煮たもの。けっこう味がしみて、おいしかったそうよ。節分の残った豆をうまく利用したのね」

節分の残り豆と、すでに時期はずれになった最後の大根を取り合わせてつくったスミスカリは、食品を上手に食べきる工夫に満ちた料理であり、北関東畑作地帯に共通する初午の行事食である。空っ風がふく二月、喉のかわきを抑えるためにもスミスカリは喉ごしのよい食べものだったという。気候・風土に合わせ、食品を無駄なく

使って、健康を守り、味覚を満足させた人々の知恵には、ただただ脱帽するばかりである。

節分の日に





リレーエッセイ (5)

高橋富士子

生まれたばかりの赤ちゃんが、ぱっちり目を開けてジーっと見つめている。大人がすっかり忘れてしまったコミュニケーションの方法で、何かを交信しているように思える。新しい命の誕生を日々目の前にして、人間は誰でもこんなに無垢だったのだと、自分自身の生き方を改めて考えてしまう。

準夜勤務。逆子の産婦の陣痛がだんだん強くなり、子宮口は全開大に近くなる。逆子の分娩は、できるだけいきませないで、呼吸法で痛みを逃し、ゆっくり分娩にもっていく。まず胎児の左足が自然に出てきた。それでもまだまだ苦しむ産婦に呼吸法を促し、自然に進むのを待つ。三十分過ぎても、経過は変わらず、胎児の心音が少しずつ悪くなる。やむなく、この

次点で医師からの指示に従って、いきみをかけさせると、お臀、右足、両手がゆっくり出てきた。

「ここまでは、うまくいった。次は頭だ。先生、頼むよ」と心の中で声を掛ける。産婦はいきみ、医師は力一杯引く。頭は出ない。再び、医師から「いきませろ！押せ！」と声が掛かる。もう一人の助産婦がお腹の上から押す。私は「いきんで！」と、産婦を叱りつけるように叫ぶ。産婦はいきむ。医師は引く。それでも出ない。赤ちゃんの手足がダランとして緊張がなくなり、皮膚の色が青白くなってくる。「このまま死んだらどうしよう」と、そんなことが頭の中をよぎり、私は泣き出しそうだった。産婦は悲鳴を上げているが、もうどうしていいかわからず、陣痛とは関係なく産婦のお腹を押し、いきませ、医師が引いた。頭が出た。アプガールスコア三点、仮死状態だった。

「吸引！、泣かせろ！」の医師の声。吸引をし、酸素を送り、刺激を与える。「お願いだから泣いて！」と声を出して祈る。医師が心拍数を確認し、「大丈夫や！焦るな」と一言。その声が頼もしく、安心感を与えてくれた。赤ちゃんの皮膚の色が少しずつ紅みを増し、「オギ

「ヤー」と泣いた。分娩室に立ち込めていた緊張感がその瞬間にとけ、医師と若い助産婦と私は、何も言わず、泣き笑いの顔になった。わずか十分ほどの出来事であったが、とても長い時間が経過し、大きな仕事を成し遂げた感じがした。それは、助産婦四年目にして初めて体験した恐怖であり、無事に産ませることの難しさ、命を生かすことの大変さを改めて実感したお産だった。

産婦人科外来へ、十六歳の少女が母親に付き添われて受診に来た。妊娠八ヶ月、予定日は来年の正月だ。誰にも妊娠したことを相談せず、母親も数日前に気づいたと話す。「最終月経はいつ？赤ちゃん動くの感じる？」と聞くが、あくびばかりして何も話そうとしない。「あなたが生むのよ」と語りかけるが、他人事のような顔をし、表情一つ変わらない。この子は自分の心と身体を大切にすることを誰にも教わらずに育ったんだろうか、産まれた子供はどうなるのだろうか、と考えると、悲しい気持ちになった。この少女の人生はこれからだ。陣痛の痛みに耐え、一つの命を生み出した時、何かを感じてほしいと願うばかりである。

女性の体は、生殖に関わる機能を備えていて、その機

能は産む、産まない、産めないにかかわらず、自分の人生と切り離すことのできないものである。子を産み育てることも、産まないで生きていくことも、等しく価値のある、一人一人の人生である。命を見つめることができるこの仕事をしながら、「なぜ産まないのか」「なぜ産んで育てようとするのか」を自分自身に問い直していくことは、命を大切にすることや、自分自身の生き方を考えていくことにつながるのではないだろうかと感じている。

最近、もし妊娠することがあれば、産んで育ててみたいという気持ちになってきている。それは一瞬の気紛れではなく、寄り道してきた生き方の中から到達した答のような気がするのだ。

◎たかはし・ふじこ 一九五八年生まれ。OL生活を経て、二十六歳で看護学校へ。三十歳から助産婦として臨

◆編集部から……この頁は、皆さんからのお便りでつないでいきます。「産む・産めない・産まない」に関する皆さんのご意見を、八五〇字以内にまとめてお送りください。

(送り先 神戸市灘区上野通七―一四、吉田清彦)

ヤング・イン・ワンダーランド

今月のテーマ

仕事

酒井和子

ジョウ（19歳）は、昨年東京の高校を卒業して就職したが一年で退社。現在は書店でアルバイト。大志（19歳）は、今年四国の工業高校を卒業して東京の寿司チェーン店に就職。会社の寮に住む。

ジョウー大ちゃんは、なんでスシヤかなあ。
大志ー調理師になりたかった、コックじゃなくてね。レストランってメニューが多くて面倒じゃない。
ジョウーこんなはずじゃなかったってことない？

大志ーまだ板場には出られないから、裏でみんなのご飯を作ってる。まさか自分の食うメシを作るとは思わなかったけど、今我慢すれば、来年には一年生が入ってくるから、こき使って、多少は楽になる。ジョウ君は何にやりたいとかないの？

ジョウー今は金が稼げればいい。去年高校卒業して入った会社は、友達がいってラクチンだった。でもつらくてさ、自分のやりたい仕事でもないし…。今は自分がやりたい夢にたどりつくまでの仕事を探しているところ。

大志ーどんな仕事だったの？

ジョウー機械を動かすICの基盤があるんだけど、その設計。電気の流れを計算して、この部品はここに置いて、ってデザインする。すっごく忙しくてさ、基本給で十四万、残業バッチリして徹夜して十五〜十六万。保険もなくて、とにかく辞めないとダメになると思って。

大志ーボクは手取りで十三万六八〇〇円、寮費が三千円引かれる。水光熱費はない。パチンコもやってないし酒も誘われないと飲みに行かないし、何で金がないんだろう。CDぐらいだよ、買うのって。

ジョウーばくら、大学行ってないじゃん。大学入って、

それから商社なんかに入るのってどう思う？

大 志―ゼンゼン考えたことない。オヤジはサラリーマンだけど、サラリーマンになりたいなんて思ったことない。勉強したいとも思わなかったし。

ジョウ―一緒、一緒。

大 志―ボクは親の人生と同じようなことをしたいと思っただけじゃない。オヤジの仕事って、ただ金を稼ぐためだけじゃない。そこはワタシと違うんで。

ジョウ―ウチは、大学に入って、なんて進路決めちゃうような親じゃないじゃん、子供放棄した勝手な親じゃない子供に相談なんかしないしさ。

大 志―親が決めちゃったりするのって息苦しいだろうね。ボクは親が何しようとか関係ないね、ただ食わしてくれれば。フツのサラリーマンって、社長になりたいからなんのかな。

ジョウ―出世だろうね。話は変わるけど、結婚とか子供ができたらか、不安ない？

大 志―日本に住んでる限り、何とかなるんじゃない。寿司屋は店がつぶれても他の店があるしね。相手にパートナーでもやらして。

ジョウ―ダメですね。男女雇用均等法とかあるけど、女は結婚して仕事辞めても、主婦という仕事が残されてるじゃん。でも男は結婚して仕事辞めるってわけにいかないし、仕事辞めたらブーじゃん。とりあえずの仕事はあるけど、一生食って仕事って必要だよな。

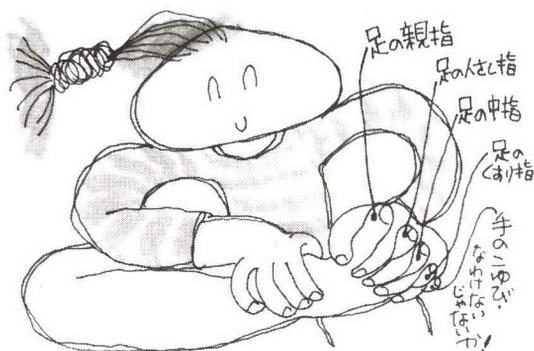
大 志―ジョウ君は、やりたい仕事ってないの？

ジョウ―とりあえず、おぼろげながら、保父さんとかやりたいたいね。どうやればいいのかって調べてないけど。

大 志―手に職つけるっていうの、そのほうがいいよ。

ジョウ―オレはさ、やりたいことをやるための仕事を探してる。夢にたどりつくまでに、どういう仕事をしていくかっていうこと。だから今は、どんな仕事でも基本的には売春婦と同じだと思ってる。時給で身体を売っているという意味でね。

大 志―ボクは今の店で一生過ごすわけじゃないけど、この業界で一生食っていこうと思ってる。今の店は踏み台みたいなもんだから、教えてもらえることは取っちゃおうと。キャリアっていうの、他の店で使ってもらえるように、恥かかないようにガンバルゾ、と。



からだに
やさしく
してあげよう

テレビのコマーシャルではないけれど、風邪の季節がやってまいりました。今年の冬を暖かく過ごすためのヨーガをご紹介します。

ヨーガは、食後二時間以内と、入浴前後三十分はやらないことが原則ですが（今頃、こんなことを言っておめんなさい）、私は、お風呂の中で、足ほぐしをいつもやっています。「入浴前後にはしない」というのは、ただでさえ、血行がよくなっているので、それ以上ヨーガをすると、心臓に負担がかかるからです。心臓の弱い方は、様子をみながらやってください。この足ほぐしをすると、からだが温まって、冷え性で、夜、足が冷えて眠れないなどということはなくなります。

もうひとつ、私がお風呂の中でやる理由は、お風呂にただ沈んでいるのは退屈だからです。忙しい人は、改まってヨーガをするための時間をつくるのは難しいし、あまりきちんとやろうとすると長続きしません。エレベーターにのったときとか、テレビを見ながらとか、ちょっとした機会をつかまえて気軽にできるといいですね。これを生活ヨーガ、あるいは、ながらヨーガと私は言っています。

【足ほぐし】片足を、膝を折ってもう一方のものの上に乗せ、手の指で、足の親指と人差し指（足もこう言うのでしょうか）をつかみ、できるだけ間を開くように、また付け根から引っ張るようにしながら、交互に動かします。次に、人差し指と中指、中指と薬指と順番にやっています。終わったら、足の裏全体を手の指で指圧します。足の裏は、体の内臓器官とつ

女
河村
ふみ
絵
加藤
由美子



ながっていますから、指圧していて、凝っているところや、ちょっと痛いところがあったら、そこを少し丁寧に揉んでください。次に、手の指と足の指を交差させ（付け根までしっかり入れ込む）足の指全体をつかんだ形で、足首を回します。

次に、風邪の予防になる、両足伸ばしのポーズです。これは、テレビを見ながらでもできます。

【両足伸ばしのポーズ】足を伸ばして座ります。足はそろえます。手で足の親指をつかみますが、手の人差し指を足の親指と人差し指の間に入れ、手の親指で、足の親指の腹を持つようにします。届かない人は、届くところまで手を伸ばし、かかとをぐっと前に突き出してください。そのまま、胸を反らし、息を吸って、吐き出しながら上体を前に倒していきます。背中と足の裏全体が気持ちよく伸びます。それを何回か繰り返します。

「もう、風邪をひいちゃったよう」という人は、残念でした。きっと、からだは休みたいのです。暖かくしてからだを休めてあげてください。風邪薬は、いろいろありますが、からだが温まって、いかにも効果がありそうだという飲み物をひとつ紹介しておきましょう。

ショウガのすり下ろしを大匙軽く一杯、梅干し一個（種を取り除いて適当にちぎる）、醤油小匙二・三杯。これを、小さめの湯飲み茶碗に入れ、番茶を注ぎます。かなり、辛めの味です。ショウガは、肺の機能を調えるのだそうです。試してみてください。それでは、お大事に。

読者の広場



「産む、産めない、産まない」を読んで
今から四十年ほど昔のことになりますが、
私は、その頃、山形県の米沢市に住んでお
り、隣の家のお嫁さんが毒を飲んで死んだ
事件がありました。

その理由は、お姑さんから「何もできな
いくせに子どもだけは産む」と非難された
からということでした。彼女は看護婦で、
なまじ知識があったばかりに、墮胎薬を手
に入れ、失敗して死に至ったのだそうです。
雪の積もった月の照る道をリヤカーに揺
られながら、病院からの帰り道、遺言とも
思える悲痛な言葉を、十五歳の多感な少女
であった私は涙ながらに聞きました。
「みち子さん、決してお姑さんのいる所へ

お嫁に行きなさんな、私のような目にあっ
から」。その言葉を聞いたあと、私は隣の
お婆さんと口をきけなくなりました。お嫁
さんが死んで一年目に、二人の子どもがい
るといふ理由で新しいお嫁さんがきました。

女は子どもを産む道具、家をつなげる機
械のようなものと、今にして考えます。看
護兵であった隣の息子さんは、共に死線を
越えてきた妻を、どうして守り切れなかつ
たのでしょうか。産んでも言われ、産まなく
とも言われ、産む時は男を産むように言わ
れ、そんな相手に都合よく産まなければな
らないなんて、ひどすぎます。

いわき地方では、車で三十分以内の所に
しか嫁に行かせないという家が多いのです。
それは、田植えや稲刈りに娘を呼びつけて
手伝わせるためです。そしてそれが、嫁さ
んの唯一の息抜き場にもなっているのだ
です。

三十年経っても、車が欲しければ実家か
ら車を買ってもらいます。婚家は、あくま
で他人の家です。

女は差別されていますが、その中でも地
方の女はもっとひどい状況に置かれていま
す。今のように結婚をするもしないも自由
ということだったら、私は結婚してなかっ
たと思います。(福島 大川原みち子)

◇ この夏に思ったこと

今年の夏、子どもたちがおたふく風邪に
かかった。明けても暮れても“人生ゲー
ム”をし、窓の外を見ながら過ごした。こ
んなアスファルトに囲まれた小さな庭にも
たくさん鳥や虫がやってくるんだという
しい発見をし、それなりに楽しかった。そ
んな折、お向かいのアパートが壊されるこ
とになった。パブルの崩壊と相続争いの揚
げ句に、手放したとのうわさだった。まだ
身体の丈夫な定年前のおじさんという風格
の建物だった。

先に爪を付けたパワーションベルがやっ
て来て、初めに窓を一突きする。ペリッ、バ
リバリ。回りの壁が崩れ、屋根までが紙の
ようにペリペリはがれていく。まるでテレ

じて怪物が模型の家を潰しているかのようだ。家の解体がこんなに虚しいとは思わなかった。時々太い柱が生きて苦しんでいるかのようにヌツと突き出てくる。なかなか折れないのだろうか。何度も回りを突き崩し、巨大な爪で摘まみあげる。柱の山ができる。無造作に捨てられたラーメン屋さんの割り箸の山みたいだ。爪は、次にふやかした高野豆腐のようなものを摘まみあげた。畳だ。隣に高野豆腐の山もできる。二階の隅に布団が残っている。タンスがおいてある。壁にはアイドルのポスター。この家はすっかり全部が粗大ごみ。ショベルカーで細かく潰して、トラックで運び去る。家全体が何もかもいっしょくたに産業廃棄物とし埋め立てられるのだ。

私は何年か前に見たテレビの墓場の風景を思い出した。南港の埋め立て地の一角。テレビが整然と何重にも積み重なっている。うつろに宙を見ているテレビ、テレビ、テレビ。永遠に朽ちること無くこうして並ぶ。テレビの向こう側には冷蔵庫。その向こう

にはごみでできた土地。今、私たちは生活の中でいらなくなったものの多くを、こうして目の前から消し去り、自らの手は汚さずにどこかにごみの山を作っている。しかし場所は無尽蔵にあるわけではないのだ。家も買い替えの平均年数が二十年を割り、使い捨てになってしまったらしい。車、家電製品をはじめ、日常のあらゆるモノが容易に作られ、使い捨てられ、埋められてしまふ。こんな暮らしに終わりが来ないはずがない。

私は四年前に家を建てたときのことを考えた。たくさんの柱を丁寧に一つ一つ刻んでいく大工さん。完成した家を我が子のようになんかおしげに見上げる設計の人たち。ほんの一握りの人たちだけど、こうしてこたわってモノを作り続ける人たちがいる。こたわって住む私たちがいる。たくさんの作り手が積み上げてきた思いや苦勞を知る私たちは、愛おしんで長くこの家に住み、できれば次の住み手へと引き継いでいきたいと思う。まぢがっても粗大ごみにはした

くない。家の解体の光景を見ながらそんなことを思った。(大阪 南野容子)

◇ 十月号を読んで

銀行の使送員なるものに転向して一カ月がたとうとしています。本・支店間の書類を持って、毎日、新幹線の下りと上りの往復です。車中、十月号をじっくり読ませていただきました。じっくり読むと、石川さんの『地域の暮らしと家庭科教育』は重みのあるものです。無駄な表現はなく、短い文章の中に、石川さんの実践の重みを感じられるのです。その実践とは、勿論、教科書中心の全国共通型ノッペラボーではなく、表題通りの『地域』に結びついた、生きていく実践なのです。お米は噛めば噛むほど味が出ると言われてきました。そのお米のことなど書いた石川さんの文章は、読めば読むほど味が出るものなのでした。余分なことですが、八・九月号の「冷や汁うどん」と「オッキリコミ」、食べてみたいですね。

(東京 向井豊昭)

◆自分の体を信頼し、体から出て来るいろいろなメッセージをそのまま受けとめ、ありのままの自分に出会うプロセスを辿っていく、フォーカシングのセミナーに参加した。体の各部分を優しく揉みほぐして、体と心をリラックス。こんなにこまやかに、注意深く体をいたわったことがあったかなと思えるほどに……。体の反応を見ながら体に触れていると、何とも心地よいほのぼのとした温もりが体中に溢れてくる。体と心って本当にひとつなんだなあと思感する。(有坂)

♠以前飼っていた犬は、胸やけがすると草やうんこを食べていた。自分のからだをコントロールしながら生きている生物そのものだった。「健康」のために私たちがやっていることは、生物としての自分のからだに本当につきあっているのだろうか、と原稿を読みながら考えていました。からだにいいことをする、からだにいいものを食べる、のではなく、自分のからだが必要とするものを自分でどれかキャッチできるか。そんな感覚を身につけたいものです。(石橋)

♥この頃、外に出るとあまりに健康で若い人ばかりを想定してできている町作りが気になり、家では狭くて動きにくい間取りが気になる。先月のWeの特集以来、私の関心はずっと高齢化問題に向いているようだ。そこで、少しは気分転換をと推理小説『親指のうずき』に手を伸ばしたら、これまたイギリスの養老院が舞台だった。クリスティーの老人に対する視点も垣間見えて、推理小説を二倍に楽しめた。もうしばらく、この問題意識から抜け出せそうもない。(石海)

◇心とからだ、のびのびと、楽に、解きほぐしてあげたい、と常々思ってきました。けれど最近、なんで自分を“解放”しなきゃいけないの、病んでいたっていいじゃない、と思い始めています。自己啓発プログラムなるものに、はまる友人を見ていると、心とからだの“境界線”の危うさ、“自分を解放させる”ということへの強迫観念を感じます。

でも、このテーマの怪しさが好きですね。お金があれば、私もいろいろ探検してみたいもんだと思います。(中村)

♣編集後記が思いつかない時は、人を読んでから書く。今回は中村さんに触発されました。何の悩みもなく、気持ちが平和だったらいいなあと思いつつ、いざそうなると、ナンカツマラナイ。じたばたしてるほうが、人間くさくて面白いのかもしれない。最近はラジニージなんか読みながら、明日は平和に暮らせるような気がして眠るのだけれど、翌日は元の木阿弥。だからといって落ち込むこともなく、佐野洋子のエッセイなど思い浮かべて元気になってしまう私です。(河村)

★編集長といっても、雑用コーディネーターだから、あれもこれもで頭がパンクしそう。家に帰れば、また、主婦+αの、複数同時進行形の世界が待っている。

「ややこしさとつきあう」タフネスは身についても、ストレスはストレス。そういえば過労死するのは、仕事も家庭も、の優しい男が多いのです。仕事一筋の単線型はなぜか生き残る。家事も育児もすると豊かな生き方が、と甘い誘いをかけながら、「そう、時間にゆとりさえあればね」と、つぶやいてしまう私。(稲邑)

くらしと教育をつなぐ—We

Vol. 1 No. 8 1992年12月15日発行

定価500円(本体485円)

年間購読料/定価7500円(送料共)

発行/Weの会 編集/稲邑恭子 河村ふみ 印刷所/(有)イ・エム・ピー 〒102 1代目区船田橋2 5 2

〒225 神奈川県横浜市緑区市ヶ尾町1161-8

共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101

郵便振替 東京3-754314 WE編集室

三菱銀行 大久保支店 普0264724

Weの愛読者の方に——ウイ書房の左記5冊の単行本を

一冊一〇〇〇円 送料三〇〇円の特別価格でお頒ちします。

●男女で学ぶ新しい家庭科

—京都における歩みと実践—

森 幸枝

家庭科の男女共修をすすめることは、家庭科
それ自身のためだけではなく、何よりも未来
に生きる生徒達に対する教師としての責任に
おいてあった。今それが確かなものになった
全国学校図書館協議会選定 価 一三三九円

●私塾霞国語教室風景
もしかしたらちいさなじゆくはユートピア

武田 秀夫

さまざまな種類のけものたちが、傷を負った
もののおとなしきで互いに争わずじつと湯に
つかっている静寂。小さな熱は、もしかし
たらさびしく悲しいユートピア
全国学校図書館協議会選定 価 一七五二円

●子どもって不思議

—学ぶことは生きること—

長谷川 孝

「まなび」の文化は土壌の文化
地球を支えてきた「つち」の文化
「つち」がこわされたとき
地表はささくれだつて 緑も失われる
価 一三三九円

●教室のミニ舞台から

—こぼれ話20—

児玉 澄子

自らの旅や、出会いを語った珠玉の20編、教
室に好奇心が息つき、生徒たちの目が輝く。教
胸に薫ったものは？
価 一三五〇円

●へ詩集∨夢運び屋

羽生 楨子

大きい水玉、小さい水玉、転がりながら、鈴
を振るような言葉で、詩人のかぐわしい夢を
伝えていく……
価 一五四五円

あなだが、この案内をご覧になった今日から、93年3月31日まで
We愛読者の方に限り、期向を限ったのサービスです。必ず期向内に
前金でのご送金下さい。3冊以上ご注文の方は送料当社負担いたします。

182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

ウイ書房

Tel 03(3326)1380

振替口座 東京6-59867



くらしと教育をつなぐWe 1992年12月15日発行 第1巻第8号

定価500円(本体485円 年間購読7500円送料共)